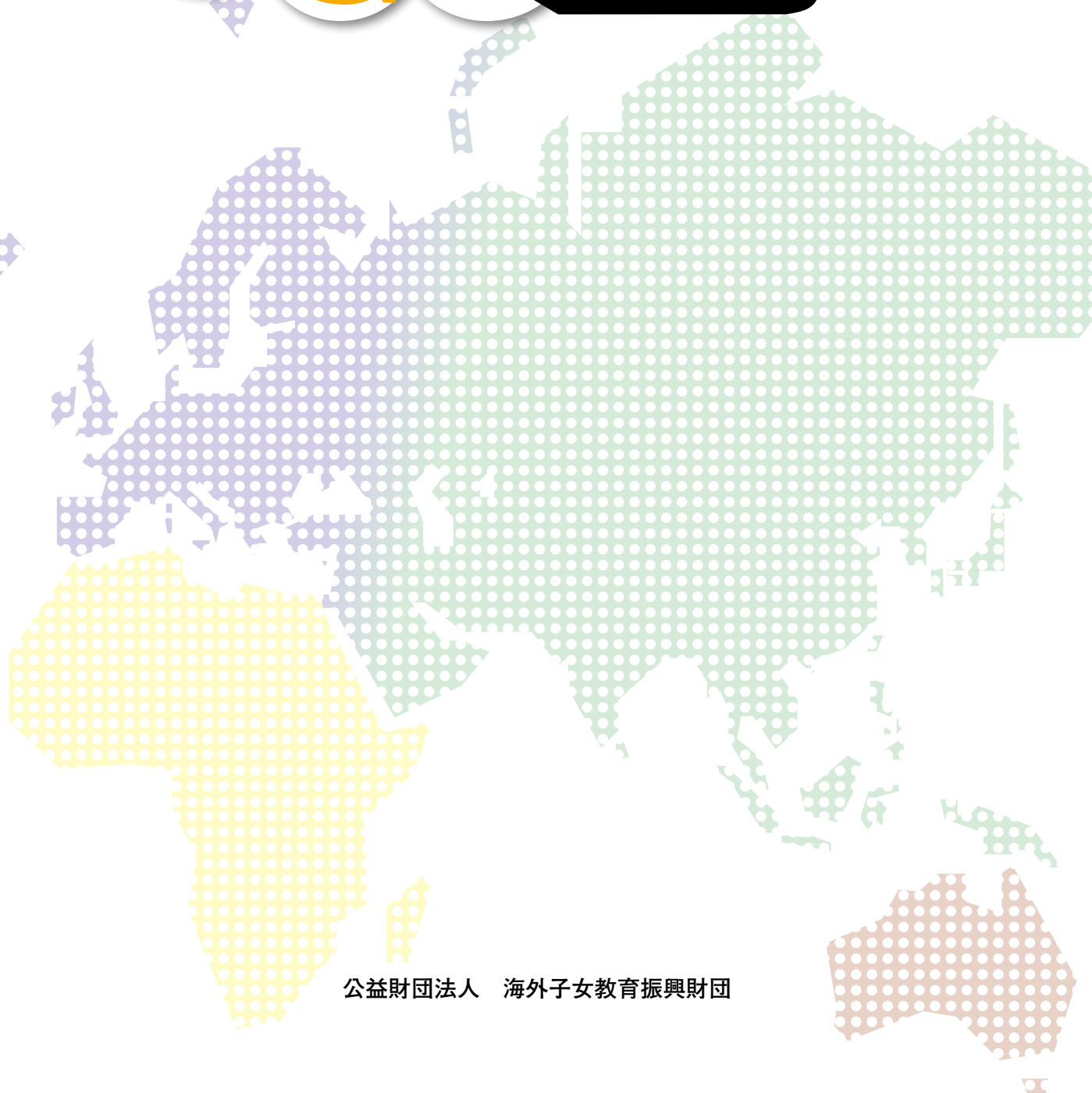


2021年度

文部科学省委託事業  
「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」(略称: AG5)

エー  
A ジー  
G ファイブ  
5 だより 集



公益財団法人 海外子女教育振興財団

## 本冊子について

弊財団は、1971年に外務省および文部省（現 文部科学省）の許可を受け、海外で経済活動を展開している企業・団体によって設立されて以来、海外赴任者・帰任者のための教育相談・情報提供や、日本人学校・補習授業校への財政上・教育上の援助等をはじめ、政府の行う諸施策および維持会員の要望に相呼応して幅広い事業を展開・実施してまいりました。

一方、日本政府においても、近年急速に発展してきた経済社会のグローバル化に対応する人材育成を喫緊の課題と捉えており、文部科学省では在外教育施設をグローバル人材育成拠点と位置づけて、大学・民間研究団体等の研修者と連携して評価・検証を行い、より高度なグローバル人材の育成を見据えた先進的なプログラムの開発・推進を図ることを打ち出しました。

そして2017年度に弊財団は文部科学省からの委託を受け、それらの指導体制、指導・評価方法、ICT教材の活用等の実証研究を担う「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」（略称：AG5）（委員長：佐藤郡衛・明治大学特任教授／前 目白大学学長／元 東京学芸大学副学長）を実施してまいりました。

その成果発信の一環として、弊財団で発行している月刊『海外子女教育』で「AG5だより」としてお伝えしてまいりました連載の2021年度総集編として本冊子を刊行いたしました。本事業の成果のエッセンスを取りまとめた1冊となっておりますので、国内外の教育現場のさらなるグローバル化の一助としていただけましたら幸甚に存じます。

5ヶ年計画で推進してまいりましたAG5は本年度で終了いたしますが、弊財団では引き続き、「日本人学校におけるグローバル人材の資質形成のためのプログラム開発」や「日本人学校など在外教育施設におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発」、「南米日系人および現地コミュニティにおける日本語教育・日本型教育・日本文化の発信・普及のためのプログラム開発」などに取り組み、これを通じて新たに開発したプログラムや提言を国内外の教育施設へ周知・普及することにより、高度グローバル人材育成に貢献することを目指してまいり所存でございます。

今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2022年3月

公益財団法人 海外子女教育振興財団  
AG5事務局

# エー A ジー G ファイブ 5 だより

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)



## アスンシオン日本人学校による日本語学校での オンライン出前授業・教員研修の試み

AG5運営指導委員・東京学芸大学国際教育センター准教授 見世 千賀子

戦後移住の多いパラグアイには、首都アスンシオンを含む3都市と地方の6つの日系人移住地に日系人子弟に向けた日本語学校があります。各校では国語・日本語や書写、音楽、図工、体育、日本文化（四季の行事、和太鼓等）などを取り入れた教育活動を行っていますが、世代が進むにつれて日本語の継承は難しくなっており、教師の確保や力量形成のための研修は、日系社会の大きな課題です。今回は、アスンシオン日本人学校の先生方が、教員研修のニーズに応じて、コロナ禍の2020年に行い大変好評を博した、日系人の子供たちへのオンライン出前授業と教員研修の試みを報告します。

アスンシオン日本人学校では、これまで日本語学校（以下、日語校）や日本式教育を取り入れている現地校の教師を対象に授業公開や研究協議会、日語校での日系人児童生徒への出前授業や教員研修会を行ってきました。しかし、昨年はコロナ禍にあつて対面では行えませんでした。そこで、いち早くオンライン授業に取り組んできた日本人学校が、ZOOMによるオンライン出前授業と教員研修を企画し、六名の派遣教員全員で六回の出前授業兼教員研修を行いました。出前授業の対象はアスンシオン日語校の児童生徒ですが、その日本語力には大きな差があるため、日語校教師もT2として授業に入り、必要に応じてスペイン語で通訳をしました。また、パラグアイのすべての日語校の教師に授業をオンラインにしました。自主参加の研修でしたが、毎回四十〜五十名の参加があり、一回目の出前授業は、加藤雅亮校長先生が中学部二・三年生十五名を対象に、昨年度新たに作成した社会科副読本『わたしたちのパラグアイ第三版』を活用して開発した、社会科単元「30年後の首都アスンシオンの街づくりを考えよう」をテーマに行いました。

新たな副読本では、日系人の移住の歴史に関する資料や記述を増やし、日本人学校だけでなく日語校の児童生徒も活用できるような工夫を凝らしています。授業の大きな流れは、まず副読本を紹介し、昔と現在の写真からアスンシオンの街の変化を読み取ります。次に、都市問題について考えるための手がかりとして日本の中学校地理の教科書の内容を紹介した後、アスンシオンの良いところと課題について生徒に考えさせます。その後、世界の都市の工夫を地図や写真を示して気づかせます。そして、ZOOMのブレイクアウトルーム機能を使って生徒を少人数のグループに分け、三十年後にアスンシオンをどんな街にしたいかを話し合わせ、グループごとに考えを発表させます。生徒の発表では、特に渋滞の多いアスンシオンの課題を解決し、三十年後に快適な街にするために、「地下鉄を作る」、「自転車道を整えて、もっと自転車で移動できるようにす



る。環境にも健康にも良い」、「川を使って水上交通をもっと行う」、「パラグアイ川の向こう側に新しく首都を作り、もっと橋を架ける」等の意見が出ました。授業後の生徒の感想には、「いろいろな資料があり、面白かった」、「自分たちの街の未来を考えるのは興味深かった」、「私たちの街を、私たちが将来いい街にした」等がありました。

この授業では、資料から必要なことを読み取る技能や都市問題への知識理解を得て、今後自らの住む街・社会をどう創りたいのかを考えることができる市民としての資質や能力を育むものになっていったと思います。参加した日語校の教師からは、「実際に生徒たちが見ている画面が見られたことで教材の提示や発問などの参考になり、今後の教材準備や授業展開を考えるうえで参考になった」、「ZOOMを使った授業でグループに分けての話し合いなど、いろいろできることを知る機会になって良かった」、「副読本の活用例について学べた」等のほか、オンライン授業の方法や副読本の活用方法、生徒を飽きさせず考えさせやすいスライド教材の作り方や提示の仕方等、大変参考になったとの感想や、「社会的な考え方を育てることが必要であると気

\* T2：特定の子どもの支援を担当する教師



てわかりやすく説明したりしながら、最後は、移住当時の生活について、もっと知りたいと思つたことを一人ひとりに発表さ

せませす。「昔のこともっと知りた」といった声がかれました。この授業では、日本語での発話を促し、移住への興味・関心を持たせる工夫がされており、児童に次への学びの意欲を持たせるものでした。

「とても参考になった。普段、読み書きを中心していたが、子供が飽きる授業を行っていたことを反省している。もう少し子供たちが興味を持つ授業にしなければならぬということをお伝えされた」、「面白くて興味のある授業をするのが大切だと思つた。子供の思いや考えを大事にしながらか的的好奇心をくすぐり、学習意欲を引き出すような授業をする必要があると感じた。答えを全部解説するのではなく、自分で考えさせるのが大事だと気づいた」等の感想がありました。

「とても参考になった。普段、読み書きを中心していたが、子供が飽きる授業を行っていたことを反省している。もう少し子供たちが興味を持つ授業にしなければならぬということをお伝えされた」、「面白くて興味のある授業をするのが大切だと思つた。子供の思いや考えを大事にしながらか的的好奇心をくすぐり、学習意欲を引き出すような授業をする必要があると感じた。答えを全部解説するのではなく、自分で考えさせるのが大事だと気づいた」等の感想がありました。

ついた」といった自らの教育観を振り返る感想がありました。

金元弘子先生の授業でも副読本を活用して、小学部四・五年生を対象に日系人の移住について学習する総合的学習単元「のこしたいもの」をつたえたいもの」が実践されました。

導入では、先生と児童の距離を縮めるために、アイスブレイク（以心伝心ゲーム）が行われました。先生は、「みんなが好きなパラグアイのお菓子といえば?」、「日本の食べ物といえば?」といった問いかけをし、子供たちはその答えを紙に書いてビデオカメラに映します。幾度かのやり取りの後、移住についての学習に入ります。クイズ形式で、移住地まで何で行ったか考えさせたり(答:牛車)、副読本で実際の写真を見せ

ていきます。出前授業の前には、小学校六年生十三名を対象に行った伊原達也先生の理科の授業もあり、単元名「考える観察」科学の考え方を学ぼう」では、理科室から実際に二つの不思議な現象・実験を見せながら「観察する、仮説を立てる、実験する、考察する」という科学的な考え方の流れを学びました。

子供たちからは、「あまり実験を学校でやっていないので興味深かった」、「実験は楽しい。もっといろいろな実験をやってみよう」といった感想があり、参観した教師からは、

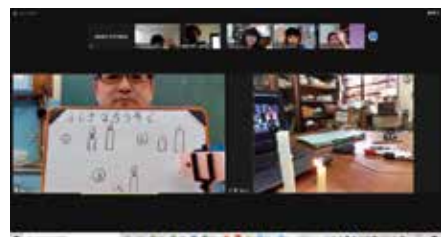
成に資する取り組みができると思います。他校の教師からも「昨年、中学生を対象とした移住学習の授業に『移住すごろく』を使わせていただいた。パラグアイの日系のルーツをクイズ形式で学び、とても盛り上がった。この度いただいた副読本も、これから大いに役立てていけると期待している」との声がありました。

この他の出前授業には、小学校六年生十三名を対象に行った伊原達也先生の理科の授業もあり、単元名「考える観察」科学の考え方を学ぼう」では、理科室から実際に二つの不思議な現象・実験を見せながら「観察する、仮説を立てる、実験する、考察する」という科学的な考え方の流れを学びました。

「とても参考になった。普段、読み書きを中心していたが、子供が飽きる授業を行っていたことを反省している。もう少し子供たちが興味を持つ授業にしなければならぬということをお伝えされた」、「面白くて興味のある授業をするのが大切だと思つた。子供の思いや考えを大事にしながらか的的好奇心をくすぐり、学習意欲を引き出すような授業をする必要があると感じた。答えを全部解説するのではなく、自分で考えさせるのが大事だと気づいた」等の感想がありました。

本稿ですべての授業を紹介することはできませんが、参観した教師の感想からは、いずれにおいても、自らの授業実践や子ども観・教育観を振り返り、相対化して捉え直すきっかけとなっており、今後の授業改善につながることが伺えました。

参観はオンラインでも可能なため、日本型教育の発信や教員研修において新たな可能性を実感させるものでした。時差の問題はありますが、日本から教員研修を行うことも含め、今後新たにできることを検討していきたいと思つています。(出前授業の開催にあたってご尽力くださったAG5コーディネーター平岩佐江子さんにも感謝申し上げます。)





# エー A ジー G ファイブ 5 だよ

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)



## 補習授業校の先生方を対象としたオンライン初任者研修(2)

AG5 運営指導委員・東京大学教授 岡村郁子

AG5 プロジェクトでは、2020年6月から2021年3月にかけて、比較的経験の若い補習授業校の先生方を対象にオンライン会議システムを使った初任者研修を開催いたしました。AG5 初の試みとなる初任者研修会には、初任者の方々はもとより、各校で研修に当たられる管理職の先生方など世界中から各回60名にのぼる先生方にご参加いただき、おかげさまで好評のうちに終了いたしました。今月号では、12月号でご紹介した第1～3回に続き、第4回「すべての子どもたちの日本語力向上を目指して」と、第5回（フリーディスカッション）の内容と成果についてご報告いたします。

### 【研修の目的】

- (1) 補習授業校の概要やその教育の特質を知る
- (2) 授業を計画、実施、評価、改善する基本を習得する
- (3) 様々な子どもたちがともに学ぶための支援・指導の基本を習得する

### 【研修内容と日程】

- 第一回 二〇二〇年六月二日(火)  
「補習授業校とは」佐々信行・岡村郁子 (AG5 運営指導委員)
- 第二回 二〇二〇年七月八日(水)  
「授業づくり」学習計画の立て方、教材研究、評価」佐々木常広 (ダラス補習授業校副校長)、渋谷真樹 (AG5 運営指導委員)
- 第三回 二〇二〇年九月三日(木)  
「授業実践」教え方の工夫」佐藤恵美 (ダラス補習授業校・AG5 コーディネーター)、雨宮真一 (AG5 研究員)
- 第四回 二〇二〇年十二月七日(月)  
「すべての子どもたちの日本語力向上を目指して」近田由紀子 (AG5 運営指導委員)、今澤悌 (AG5 研究員)
- 第五回 二〇二一年三月二日(火)  
「フリーディスカッション」全員

### 第四回「すべての子どもたちの日本語力向上を目指して」

補習授業校の最大の特色は、日本語力の異なる子どもたちを、一つの教室で同時に指導する点にあります。こうした状況においてどのような支援・指導が有効であるのか、AG5 補習授業校チームより、近田委員(目白大学専任講師)と今澤研究員(甲府市立大岡小学校)が講義を行いました。まず今澤研究員より、「教科学習を通して日本語力の向上」「日本語力に課題のある子」に焦点をあてて」と題してのお話です。

ともいわれ、認知的な力、思考力・判断力・表現力を含みます (Cummins, 1984, 1986)。

日本語力に課題のある子どもたちの授業におけるつまずきの多くは、学習の中で、日常生活(生活言語)に出てこない語彙・表現(学習言語)が出てくることや、学習経験がないことによるものです。また、海外に暮らす子どもならではの生活経験や文化の違い、生活環境の違いも影響しています。このような子どもたちを指導するために、以下の二つの提案がありました。

①「教科の目標」と、「日本語の目標」を明確に立てること

○「教科の目標」＝「教科としてのどんな力を、どこまで高めるのか」  
○「日本語の目標」＝「教科の目標を達成するためにはどんな日本語の力がよいか」

この二つの目標について、AG5 の研究授業(ワシントン日本語学校 福嶋先生の実践)を例に説明したのが、次ページのスライドです。気持ちの変化を想像できる」という「教科の目標」とともに、それを達成するための「日本語の目標」、すなわち「はじめくだったおじいさん(の気持ち)が、だんだん(少しずつ、ゆっくりに)になりました(変わりました)」

自然習得が可能であり、通常一二年で習得されます。これに対して、学習に必要な「学習言語能力」は自然習得が不可能で、組織的な学習が必要とされ、習得には五〜七年かかるといわれています。これは「認知学習言語能力」(CALP: Cognitive Academic Language Proficiency)

## 目標を明確に立てる

小3「三年とうげ」(ワシントン日本語学校 福岡先生実践)

### ① 教科の目標

「気持ちの**変化**を想像できる。」

教科の目標を達成するためには、**どんな日本語の力が必要か**

その日本語を使って、「何をできるようにさせる」のかを明確に

### ② 日本語の目標

目標にする語彙や表現を具体的に

「はじめ~だったおじいさん(気持ち)が、だんだん(少しずつ、ゆっくり)~になりました(変わりました)。」の表現を使って人物の気持ちの変化をとらえ、それを表現できる。

## 理解支援

写真やイラストで語彙や表現を理解



きり分かるように、また表現モデルを示してそれを参考に書けるように工夫します。

今年度多かつたオンライン授業のブレイクアウトルームでは、子どもたちのグループでの話し合い活動(ブレイクアウトセッション)の際に、「話し合いの流れ」と、その場面で「何を発言すればよいか」の話し型(表現モデル)を示したカードを持たせました。これにあてはめて発言することで、日本語力が十分ではない子どもたちも自信を持って話し合いに参加できるようになります。

最後に、補習校の一斉授業で行える授業の工夫五点が示されました。

#### ① 教師が授業で使う言葉に配慮する。

「やさしい日本語、分かりやすい言葉で、ゆっくり話すこと。」

#### ② 本時の目標に関連の薄い事柄については、負荷を下げる工夫をワークシート、資料、板書等の漢字にルビをふる、目標に絞ったイラストをする、等

③ 具体物や絵、図、表など、言葉以外の情報を豊富に。

④ 大切な言葉、発問、キーワード等を板書やカードで視覚化し線や色で分かりやすくする。

⑤ 個に合った課題や活動を準備する

ワークシート、ペアワーク等

ワークシート、ペアワーク等

続いて近田委員より「チャレンジ編」としてお話がありました。

補習授業校の教室においては、日本語力が様々な子どもと一緒に学習します。このことは一見するとデメリットのようですが、実は、日本語力の十分でない子どもたちはもちろん、日本語力が高い子どもたちにもメリットがあります。グローバルな環境で学ぶ子どもたちだからこそ持っている「よさ」を活かして、「互いに学び合う」ことができるからです。この考えに立つと、教師や日本語力の高い子どもたちが、日本語力の十分でない子どもたちに「日本語を教えることができる」というスタンスが誤りであることが分かるでしょう。

それでは、補習授業校の子どもたちの「よさ」とは、どのようなものでしょうか。永住・国際結婚の家庭の子どもたちは、現地校で身につけた学び方・スキル・感性、現地の情報収集力等を身につけています。一方、短期駐在家庭の子どもたちは、日本で身につけた学び方・スキル・感性、日本語力等を持っています。こうした多様な子どもたちが持つ「よさ」を活かして学び合うことは、補習授業校ならではのメリットといえます。補習授業校は自分とは違った感性・価値観・考え方との出会いの場

した)。」の表現を使って人物の気持ちの変化をとらえ、それを表現できる」という点が明確に示されていることが分かります。ここで重要なのは、国語だけでなく、算数(数学)や社会科においても、目標にする語彙や表現を具体的に示すことです。

### ② 言葉に配慮した支援の工夫を行うこと

二点目として、日本語の力に課題がある子どもたちに対する二種類の「支援」について説明がありました。

#### ○ 理解(を促す)支援

写真やイラストを使って語彙や表現の理解を助ける【下図】、絵本や映像によって学習課題・学習内容を理

解させる、テキストを段落ごとに線で囲んで視覚的に分かりやすくする、本文を紙芝居型にして興味を喚起する、本文(さし絵等)を段落ごとにバラバラにして並べかえる活動を通して理解を促す、ワークシートにして心の変化を理解するなど、これまでのAG5の研究授業の例が示されました。教科書の本文を児童に分かる日本語に直して理解させる「リライト」も、理解の支援に有効です。市販のリライト教材も出ています。

#### ○ 表現(を促す)支援

書くことの表現支援では、ワークシートの活用があります。どこに何をどんな文章で書けばよいのかはっ

です。どちらかが教え、教わるのではなく、多様な見方・考え方を「対等に学び合う」ことから、「主体的・対話的で深い学びが生まれるのです。多様な子どもたちのいる教室での学びには「総合学習型」の活動が合っています。国・地域のカリキュラム・リソース、現地校で習得したスキル、幅広い知識・現地の情報などを積極的に活用する総合学習型により、日本語力向上を目指すことができます。創造性を発揮できる学習活動を構想すること、自分とのかかわりから課題をつかみ主体的に探究するしかけを作ることが、教師の重要な役割といえるでしょう。

こうした活動の実践例として、これまでのAG5による学習活動が示されました。その一つが、ダラス補習授業校で行われた「発見！ わたしたちのテキサス」です。この実践では、自分たちの住むテキサスについて、家の人たちの協力を得ながら地理・歴史・産業などの各分野から地域情報を集めました。それをポスターにまとめ、現地校で身につけた表現力を駆使して発表し合いました。子どもたちの感性を活かした学び合いを通して、学習を深めたり広げたりすることができた例です。も

ともとの社会科学のテキストでは、日

本の地域が取り上げられていますが、それに代えて今住んでいるアメリカを取り上げること、現地校での学びと関連つけて学習することも可能になりました。

第四回の二つの講話から、補習授業校の特色をメリットとして活かし、すべての子どもたちの日本語力向上させる教室活動のヒントを得ていただけたことと思います。なお、ここで示した学習指導計画は、AG5の『楽しく日本語を伸ばす補習授業校学習活動計画集』ダラス補習授業校の実践から『』に収録されています。以下のQRコードからダウンロードしてぜひご覧ください。



### 第五回「フリーディスカッション」

最終回は四回の研修のテーマ別に以下の四つのセッションに分かれてディスカッションを行いました。

- ① 補習校の「びっくり」→うちの学校、こんなにいるいる⇒各補習授業校の様子についての情報交換、補習校調査の結果についてのコメント・感想など

- ② 授業準備の方法×学習指導計画、どうやって立てていますか？⇒学

- 習指導計画の立案方法、学習への動機づけ、学習指導要領についてなど
- ③ 授業を進める技術×授業スキルをアップして子どもたちの心をつかもう⇒授業の目標設定、効果的な授業スキルの具体例についての情報交換など

- ④ 日本語力の違いへの対応⇒全員の日本語力を伸ばす授業を目指して⇒日本語力の違いのある子どもたちの指導の工夫、国際学級の進め方など

七つの分科会に分かれて各回の講師を交えて活発な議論が行われ、短いながら有意義な時間を過ごすことができました。

最後に、研修終了後にお答えいただいたアンケート結果を少しだけご紹介いたします。

\* 一年の大半がオンライン授業という状況で、各国の皆さまがどういう風に授業をしていらつしやるかということを感じるができるのは大変強く、モチベーションとなりました。

\* コロナ禍で大変な中、貴重な研修に参加させていただきありがとうございます。他の補習校の先生方も同じように悩みながら授業を組み立てているということが分かり「一人

じゃない！」と思いつながら毎週授業を行うことができるようになりました。日本語が苦手な子どもでも、発言の機会を与えることで自信につながり日本語に興味を持ってもらえるような授業を行っていきけるようにこれからも様々なアプローチに取り組まなければ、と感じています。

今年度の初任者研修にご参加いただきました皆様、誠にありがとうございました。初任者の先生方はもとよりベテランの先生方がオンライン上で一堂に会し、よりよい授業とは何かをともに考え、学ぶ機会を持たたことを、たいへん嬉しく存じます。

また、オンラインで世界の補習授業校を巡る「学校紹介コーナー」には全十七校にご登場いただきました。ご協力に心より御礼申し上げます。

本研修は次年度も継続いたします。授業作りの基本、子どもたちの興味をひきつける工夫、模擬授業や授業の具体的なアイデアなどを留意しておりますので、ぜひご参加ください。AG5補習授業校チームでは、このほかにも、授業研究会、情報交換会、ワークショップ等の活動を通じて、先生方へのご提案とネットワーク作りを続けて参ります。引き続きご協力のほど、よろしくお願いたします。



# エー A ジー G ファイブ 5 だよ

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)

## AG5の2020年度の取り組みとその成果

AG5運営指導委員会委員長・明治大学特任教授 佐藤 郡衛

文部科学省の委託事業である「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」(通称、AG5〈Advanced Global Five〉プロジェクト)は4年目を終わりました。ただ、2020年度はこれまでと様相を異にしています。2020年初頭から始まった新型コロナウイルス感染症によるパンデミックが在外教育施設に深刻な影響を及ぼしました。AG5も大きな影響を受けましたが、困難な状況の中でどのようなことに取り組んだか、そしてどのような成果があったかについて報告します。

### 一 新型コロナウイルス感染症への対応

コロナ感染症は、これまでの教育を大きく変えました。先生も子どもたちも学校に一堂に会して、対面で授業をやるという当たり前のことができなくなりました。

この未曾有の事態に直面し、各学校はオンラインなどでの学習を余儀なくされました。国内外を問わず、先の見通せない状況にあつて、「子ども学びを止めない」ための取り組みが始まりました。このプロジェクトでも厳しい状況のもとで多様な取り組みが行われました。各学校の奮闘ぶりには頭が下がります。詳細はAG5のポータルサイトを参照してください。

これまでこの事業の評価の観点として、①学校全体で取り組んでいるか、②先生の実践力の向上につながっているか、③子どもの学習成果が向上しているか、そして④この事業を通して他の学校の実践にも役立つモデルやプログラムの開発ができたか、という四点を示してきました。四年目を迎え、特に四番目の観点が重要になりますので、そこに焦点化して二〇二〇年度の取り組みの概要とその成果について報告します。

### 二 日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発と、そのための教員研修のプログラム開発

香港日本人学校香港校小学部では、グローバルな能力を育成するための実践に取り組んできました。二〇年度の課題は、「グローバルスタディーズ」の実践の評価に焦点をあてました。グローバルクラスのプレゼンテーションスキルや英語力の向上を目的に、夏休み後にオンラインで実施した自由研究発表会の成果をどう評価するかが課題です。

そこでこうしたパフォーマンスを評価するためのルーブリック指標を作成し、評価法について検討、公表しました。これまでの実践を広く他の日本人学校でも活用できるように、「日本人学校における「探究学習」のすすめ」実践ガイドブック「第一部 理論編」の小冊子を作成しましたので、ぜひ参照してください。シンガポール日本人学校は、クレメンティ校、チャングキ校の両校で探究学習を進めてきましたが、探究料と他の教科とをどのように関連づけるか、探究料におけるSDGsの取り組み、そしてIBの視点を取り入れ



シンガポール日本人学校 小5 東京学芸大学附属大泉小学校とのオンライン交流会で「シンガポールの魅力」をプレゼンテーション

たカリキュラムフレームワークづくりなどを進め、その成果を報告書にまとめています。

この他、香港とシンガポールの日本人学校間での探究学習に関する情報交換会を開き、実践を共有したのも成果の一つです。さらに国内の研究協力校である東京学芸大学附属大泉小学校とクレメンティ校とで探究学習に関する交流学習を行いました。一つのテーマをもとにした学校間交流は他の日本人学校でも参考になるものです。

パリ日本人学校では、日本国内の五つの研究機関(情報通信研究機構 宇宙航空研究開発機構、新エネルギー・産業技術総合開発機構、科学技術振興機構、日本原子力研究開発機構)によるオンライン講座をもとに探究学習を行いました。

そして、子どもたちが「学びの地図・新聞」づくりを進め、さらに提言書も作成し、「パリ日提言フォー



ラム」で発表しました。

公の場での発表は子どもたちの成長につながります。パリ日本人学校の実践は、思考のスキル、コミュニケーションやコラボレーションのスキル、ICTリテラシー、さらには市民性の育成など二十一世紀型スキルを身につけるために学校全体で探究学習に取り組んでいるのが特徴です。探究学習で何を指すかをこの実践から学ぶことができます。

### 三 日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発と、そのための教員研修のプログラム開発

一九年度から開始したマニラと大連、青島の日本人学校での取り組みは、二〇年度はコロナで始まりコロナで終わりました。こうした状況にもかかわらず、マニラ日本人学校ではこれまでの実践を『日本語学級・在籍学級での教科横断的な日本語指導』マニラ日本人学校の対面・オンライン授業の実践から』という報告書として刊行しました。

日本語学級一〜三年生の教科横断型の学習活動と四〜六年生の在籍学級での授業が紹介され、日本語指導が必要な子どもたちの変容や指導の効果・課題が具体的に示されています。

す。特に、在籍学級の学習に参加・活躍できたことで、自信を持ち学ぶ意欲を高めていく子どもたちの様子が報告されています。他校で日本語指導を進めていく上でのヒントがたくさんあります。

青島日本人学校では、小一・二の課外の日本語指導、中一〜三を対象にした個別の日本語指導、そして在籍級での国語の授業での日本語指導の取り組みを行いました。特に、担任の先生と日本語指導の先生が連携し、教科内容についてあらかじめ学習させたり、わからないところを補充したりするような取り組みを行っています。この連携が日本語学習で重要です。

また、全校あげて多文化共生の学校づくりを目指して多様な取り組みを行っており、成果を『多文化共生の学校づくり』青島日本人学校の実践』として刊行しました。日本語指導も多文化共生の視点からの取り組みが求められますので、こうした実践は今後もますます重要になるでしょう。

大連日本人学校は、在籍学級の教科指導における日本語指導プログラムの開発を進めています。小一・四・六では国語の中で日本語指導を行っています。視覚的な支援や表現支援を重視した指導計画の改善を図り



大連日本人学校 小1 インタビューでわかったことを発表・共有

ました。中一の総合的な学習ではバイカルチュラルの視点や対話を重視した日本語指導を導入していますが、これについても実践を踏まえて指導計画の改善に取り組みしました。

このプロジェクトは三校での取り組みを踏まえ、日本人学校における日本語指導の進め方についての研究会を二〇年十一月にマニラ日本人学校を中心にオンラインで実施しました。日本語指導に関する授業づくりやICTを活用した実践と課題などをテーマに研修会を行い、三校以外の日本人学校からの参加もありました。学校をこえた教師研修の在り方を考える上で大いに参考になります。

### 四 補習授業校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発と、そのための教員研修のプログラム開発

これはダラス補習授業校を中心に

したプロジェクトですが、多くの補習授業校との連携の輪が広がっています。二〇年度はコロナ禍で補習授業校では対面授業ができない事態になりましたが、四月早々に「AG5 補習授業校情報交換会（ウィルズ対応策）」をオンラインで開きました。三十六校から五十六人の参加があり、情報交換と対応について話し合いました。その後、厳しさを増す中で「オンライン授業の課題」、五月には「遠隔授業と評価」といったテーマでミーティングを行い、多くの補習授業校関係者が参加しました。それだけ関心があり、切迫した状況にあったということでしょう。

この情報交換会は、二一年一月までに合わせて二十回実施され、参加者は各回四十〜一〇〇名で参加者



ダラス補習授業校 小6 ZOOMでの社会科授業

ストは五七〇名に達しています。また教員研修として、補習授業校の「初任者を対象とした研修会」を五回行い、十九校から六十名の参加がありました。

これは日本語力も英語力も多様な子どもたちが共に学び、成果を日本語で発信できるように、教科横断型の実践を支援するプロジェクトです。

二〇年度は学習活動計画を五校で七単元作成しました。詳細はAG5のポータルサイトをご参照ください。

AG5の活動を通して補習授業校のコンソーシアムが構築され、相互に課題を解決できるような仕組みができています。このプロジェクトの四年間の成果を見ると補習授業校のこれまでの支援の在り方を大きく転換したように思います。つまり、個々の先生の力量を形成するというより、対話と話し合いをもとに課題解決を図り、参加者全体の力量を高めていこうとしています。これまでは学習計画や指導案などを作成し、それをもとに個々の先生の力を高めるような支援を行ってきましたが、それだけでは先生の力量はつきません。このプロジェクトは、多くの学校・多様な関係者が集まり、対話から複数の視点を引き出し、そこからそれぞれ実践の方向を探るといったもの

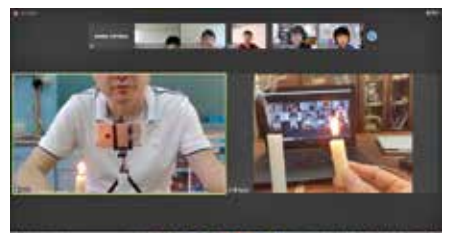
です。こうした取り組みが補習授業校関係者の内的な自立を高めていくことにつながります。

### 五 南米日系人及び現地コミュニティにおける日本語教育・日本型教育・日本文化の発信・普及のためのプログラム開発と、そのための教員研修のプログラム開発

このプロジェクトでは四年間アスンシオン日本人学校の先生とアスンシオン日本語学校の先生とで国語や日本語の指導に関する合同研修会を実施してきました。コロナ感染症が南米でも広がる中、二〇年度はオンラインで日本人学校の先生が日本語学校の子どもを対象にして出前授業を六回行いました。

対象はアスンシオン日本語学校の子どもですが、今回はパラグアイの全ての日本語学校の先生に開放しました。自主参加の研修でしたが、毎回四十〜五十人が参加しました。これもオンラインだからこそ可能になったことです。

このプロジェクトのねらいは日系人社会や日系人の子どもの教育への貢献がどうしても可能かを示すことにあります。今回の理科の出前授業は、日本語学校では経験し得ない実験を行いながら科学的思考力を伸ば



アスンシオン日本人学校の教員による日本語学校へのオンライン授業

### 副読本活用事例集



移住かるた

す取り組みでしたが、こうした日本の教育を具体的な実践を通して伝えていくことは有効な方法だといえます。

さらにアスンシオン日本人学校では現地理解教育の一環として、社会科副読本『私たちのパラグアイ（第三版）』や移住すごろく、移住かるたを作成しました。日本語学校での移住学習にも役立てられています。

### 六 学校図書館を活用した日本文化等の発信のためのプログラム開発

西大和学園カリフォルニア校の取り組みは、学校の持つリソースを地域に開放して日本文化や日本語の学習に役立ててもらい、結果として親的な人材を育成することを目指すものです。しかしコロナ感染症の影響がカリフォルニアでは極めて大きく、交流や外部の方との接触もできない事態になりました。

このプロジェクトの主目的である日本文化を地域に発信し、日本人学校と地域の学校との効果的な連携を図る取り組みを実行することが困難になったのです。そこで、図書館の効果的な活用をどう進めるかという観点での取り組みを行いました。思考力を高めるためのデジタル図書



西大和学園カリフォルニア校デジタル図書館



サンホセ日本人学校 アグアスカリエンテス  
日本人学校とオンラインで交流

活用とその有効性について在校生を対象にして検証を行っています。

日本の生活や文化に直接触れる機会が少ない海外にあって、デジタル図書は子どもたちの思考力や想像力を高めるのではないかとこの仮説のもと、デジタル図書の有効性について検証するものです。今後、その成果をAG5のポータルサイトに公開する予定です。

### 7 ICTを活用した遠隔での 教員研修及び授業実践の プログラム開発

二〇年度は、中南米もコロナ感染症の猛威がふるい、各学校ともオンライン授業の対応に迫られました。こうした状況に関わらずサンパウロとリオデジャネイロ、アグアスカリエンテスとサンホセの各日本人学校を結んだ遠隔合同授業がそれぞれ行われました。

このプロジェクトの一つの成果として遠隔合同授業のためのノウハウを「パターンランゲージ」としてまとめました。パターンランゲージとは、一九七〇年代に開発された手法で、経験豊かな人から「コツ」を抽出し、他の人がやってみたくなくなるヒントとして提示する方法です。何か始めればいいのかわからない時、あるいはやってみてわからないことがあった時、パターンランゲージを見て「こんな方法があったのか」と参考にするものです。

詳細はAG5のポータルサイトを参照してください。毎月、四校が集まるオンラインでの遠隔研修会での実践報告を通して作成したもので、遠隔授業や研修会の実践の指針になるものです。こうした「パターンランゲージ」はこれから遠隔の合同授業や研修会を行う日本人学校でも役立つものです。

### 8 日本人学校における特別支 援教育に関する遠隔指導の 実施に向けた実践的研究

この事業では、一九年より日本人学校における特別支援教育への支援を行っています。特に、遠隔での支援の在り方について検討するものです。そこで、日本人学校と特別支援



筑波大学附属大塚特別支援学校による日本人学校への遠隔指導

学校が共有できる「特別支援遠隔相談予約システム」(仮称)を導入し、遠隔支援を開始しました。

北京日本人学校と筑波大学附属大塚特別支援学校、ハノイ日本人学校と埼玉大学教育学部附属特別支援学校、その他協力機関である国立特別支援教育総合研究所、海外子女教育振興財団で共有できる外部フォルダを設定し、対象児童の状況がコンサルテーションの前に確認できるよう、「遠隔支援実践シート」、「授業動画等」を共有するようにしました。

こうしたシステムで日本国内の特別支援学校からの指導のもと日本人学校支援を行った結果、対象の子どもにも変化が見られ、遠隔指導の効果を確認できました。

### 二〇二〇年度の成果

二〇年度はコロナで始まり、コロナで終わりました。まだまだ終息の

兆しも見えません。こうした中で試行錯誤し、子どもたちの学びを止めない努力をされ続けている関係各位に改めて敬意を表するとともに、深く感謝申し上げます。

二〇年度の成果としてICTの活用が進んだことが挙げられます。学校全体でICT教育に取り組み、先生方のICTスキルは格段に向上しました。学校や国の枠をこえた実践が可能になり、このことは海外子女教育の在り方を大きく変えていくように思います。また、香港日本人学校、マニラ日本人学校、青島日本人学校の実践の成果を冊子にまとめ、さらにポータルサイトにもアップしましたが、これらは他の日本人学校にも参考になるものです。

この四年間の取り組みの成果が他の日本人学校や補習授業校にも広がっています。特に補習授業校のプロジェクトは、世界的な補習授業校のネットワークに成長していますし、マニラ日本人学校の教師研修などの取り組みも広がりを見せています。

二一年度はいよいよ最終年度です。まだまだコロナ感染症の影響はありますが、これまでの成果をわかりやすく発信し、他の在外教育施設の取り組みの参考になるようにしていきたいと思っています。



# エー A ジー G ファイブ 5 だよ

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)

## 補習授業校とAG5 「補習授業校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発」に参加してきて一

AG5運営指導委員・海外子女教育振興財団 教育相談員 三井 知之

AG5プロジェクトは、私が2018年に文部科学省のシニア派遣でプリンス頓補習授業校（日本語学校）に赴任する前年度から立ち上がりました。私は本格始動しているAG5と共にプリンス頓の補習授業校に着任したのです。学校運営にあたり、AG5の情報を活用することで、先生方の学習指導のレパートリーが広がりました。様々な危機をみんなの知恵と工夫で乗り越え、世界の補習授業校の連携がさらに深まっています。



### AG5と共に着任

在外教育施設には三回目の派遣で、以前は二回とも日本人学校への派遣でした。今回も日本人学校になるのではないかと思っていました。が「補習授業校」と知らされ、早く慣れしつかりと学校経営をしていくことが最優先の課題となりました。

子供たちは先生方の指導を受け、日曜日という限られた時間の中で一生懸命に学んでいました。普段の現地校での生活では味わえない日本語での語らいや遊びを通して、生活言語のレベルも切磋琢磨しながら体得していく様子が分かりました。そうした中、日々の文化的行事を行うのも一つの使命ですが、学校の一番の役割は子供たちに学力を身に付けさせることです。

ほぼ月一回の教員研修会が位置付けられていましたので、「子供たちが『分かる授業』『楽しい授業』」の展開を目指して、先ずは実践ということで、私の赴任期間の二年から三年の間に全教員が研究授業を行えるように計画を立てました。

全ての学年が単学級であったため、低、中、高の分科会を設定し組織的に取り組めるようにしました。同僚同士で考えを出し合うことで、一時

間という限られた時間の中でいかに子供たちにねらいをつかませ、楽しく身に付けさせるかについて議論を深めることができました。この時、AG5の情報も活用していききました。

先生方に、私は先ず、「教員にとって授業は命。研究と修養は教師にとって不可欠のものである。常に使命感をもって、子供たちの『分かった笑顔』が学校にあふれるようになるため、さらに互いに研鑽し、指導力を高める必要がある。（中略）実のある効率的な校内研修を通して、私たち自身が主体的に学ぶ姿勢で研修に向かえるようにしよう」という思いを示しました。その上で、「今あるもの、今までのものは活用する。無駄な時間は使わない。先行研究を活用する。事前の準備は分科会で責任をもって十分に深め、その通りにならなくても主張はすること。授業はメリハリが大事。重点的に扱うところ、また軽く流すところも必要。理論はもちろん大切だが、明日に使える具体的な手法や実践力も大切。限られた時間で、児童・生徒の主体性や表現力をどう伸ばしていくか。指導案には、それが書かれた『備考欄や留意点』が一番大切。それにこだわろう（抜粋）」と話しました。

ここで重要なのは、「AG5のよ

うな先行研究、先進的実践を活用しない手はない」ということです。さらに「それに乗せできれば、より効果があがる」ということです。

### AG5担当の佐々先生との 出会い

AG5プロジェクト④「補習授業校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発」（以下、補習校チーム）における運営指導委員会の担当は佐々信行先生です。

佐々先生には、私が二〇〇七年から二〇一一年にニューヨーク日本人学校に校長として赴任していた際、現地でお会いしていました。当時、佐々先生は啓明学園の校長をされており、日本人学校で行われた学校説明会で啓明学園の紹介をして下さったのです。

今も変わらない物腰の柔らかさとお話の上手さは学習活動計画作成・授業研究会に関わる方々だけでなく、補習校チームの情報交換会等々に参加されている皆さん全てがご存知の通りかと思いますが、私は十年以上前から、その人柄と「佐々」という名前が印象に残っていたのです。その後、海外子女教育振興財団に移られた佐々先生にAG5でお世話にな



るとは思ってもみなかったことでしたが、私にとっては渡りに船だった訳です。

二〇一九年の春、佐々先生がダラス補習授業校での研修会に出張で来られること、その後、ワシントンの補習授業校を回られるという情報が入りました。そこで是非、プリストン補習授業校も訪問していただき、頑張っている子供たちや先生方の様子を見ていただけないかとお願いしました。当校の授業日が日曜日というのが功を奏して、何とかスケジュールを調整していただき、学校訪問が実現できたのです。

佐々先生には校内視察に加え、授業参観もしていただきました。中三の教室では生徒の発表に対する意見を求められる場面もあり、和気あいあいとしたひとときになりました。放課後は先生方向けに直接、海外子女教育振興財団やAG5などについて



プリントン補習授業校での佐々先生による研修会

て説明してもらいました。

佐々先生の説明は穏やかな口調ながら、補習授業校の先生方を直接応援したいという思いが伝わってきました。会議室の大型スクリーンに海外子女教育振興財団のホームページを投影し、実際にAG5のサイトにアクセスして画面上に資料を呼び出して先生方に示したりしながら、その取り組みや価値について分かり易く話していただきました。

先生方からは、直接運営し、作っている先生の話ということもあり、「このように授業に役立つ資料が提供されていたこと、また財団のサイトがこんなに使い易いものであることが理解できた、有意義な研修になった」との感想が聞かれました。その後、先生方にとってAG5はさらに身近なものとなったのです。

### ダラス補習授業校での合同研究会

その夏、AG5の合同研修会がダラス補習授業校で行われることになっていました。そこにはプリントン補習授業校の担当の三人の先生の中から一名が参加し、その成果もち帰る予定になっていましたが、都合が悪くなり、他の二人の先生も予定が合わなかったため、委員の一人



ダラス補習授業校でのオンラインを駆使した合同研究会

でもあった私が急遽、参加させていただくことになりました。

当時のダラス補習授業校の宮地仁校長先生は私と同期の派遣でよく知った仲でした。事前に校内研修会の様子なども伺ってはいましたが、借用校の一室で行われた合同研修会は先生方の熱気にあふれていました。講師として岡村郁子先生、近田由紀子先生が参加されました。

全体会では最初に校長の挨拶がありました。正面のスクリーンには、東京からリモートで佐々先生が参加されていて、佐々先生からもお話がありました。

この頃は、それほどオンラインでの研究会参加がメジャーではなかったのですが、これは活用できるなど感じました。正に新型コロナウイルス感染症予防で多くの学校が閉鎖を余儀なくされる半年前のことでした。

研究会では、佐藤恵美研究主任が中心となって最初の発表が行われ、その後、授業技術ワークショップが行われました。補習授業校で効果が発揮できる内容でした。そして、グループ懇談では分科会に分かれて情報・意見交換が行われ、有意義な研究会となりました。ダラス補習授業校は比較的規模が大きいとはいえ、研究組織がしっかりとっていて、研究部を中心に推進されていることなど、見習うことが多いと思いました。

### プリントン補習授業校(日本語学校)での授業

プリントン補習授業校ではAG5担当の三名の内、二名の先生方には先に校内研究で授業を行ってもらいました。その後、新型コロナウイルスの關係で、担当の一人であった笠原朋子先生の授業は繰り越される形になりました。

二〇二〇年四月には授業が行えない状況となったため、子供たちの学習環境を整えようと、五月から教師が一日分の学習計画を立て、具体的に課題を与える形の「学習サポート」による授業を開始しました。その後、「学習サポート」に移行しました。そうした中で、AG5の学習活動



プリンストン補習授業校での笠原先生による漢詩の授業。三編の漢詩を示し、自分の好きな詩・表現とともに今昔に共通する思いを考えさせる。

計画及び研究授業が行われることになり、笠原先生に補習授業校ではあまり実践事例がなかった国語科「漢詩」についての授業をしてもらうことになりました。漢詩を扱うことは補習授業校の生徒にとってはややハードルが高いと思われましたが、笠原先生の緻密さとアイデア、計画的な準備でいい授業になるのではないかと考えました。

AG5運営指導委員会の担当は岡村先生と両宮先生でした。研究授業の二か月以上に笠原先生から学習指導計画及び指導案が出され、それを四人で検討しました。さらに十一月一日にはAG5補習校チームの先生方に加えて、二十名以上の補習校の先生方が参加してZOOMによ

るオンライン検討会が行われ、生徒たちがより興味をもって取り組めるよう話し合いました。

補習授業校の校内研修会では、全体の協議会を除き、事前の分科会は数名が限度です。しかしAG5の検討会はAG5の講師の他に、日々同じ悩みをもつ多くの先生方から「自分だったらこうしてみようかな」という率直な意見が出されるので、今までの成果に裏付けされた、よりレベルの高いものを創ることができているのが大きな強みです。あとは、クラスの実態や生徒たちの状況を考慮して展開すればいい訳です。

研究授業の本時は「情景や心情を捉えながら、白文を誦読しよう」という目当てでしたが、生徒たちは白文に返り点や送り仮名を付け、自ら誦読文にすることで、中国(唐)から伝わった漢詩を、どのように日本語として読み味わってきたのか、古人の工夫に触れることができました。

なお、授業で使われたワークシートはAG5のウェブサイト (<https://ag-5.jp/report/theme4/study/detail/125>)にあるので参照して下さい。学校の実態により軽重つけて取り組ませてもいいと思います。多くの先生方の実践により普遍的な授業になっていくと思います。

### 補習授業校情報交換会

補習授業校は、それぞれの学校の設立経緯や運営の考え方等により、「補習授業校」という名前は同じでも一校一校が全くの別物であると言っても過言ではありません。またそれぞれの学校ごとに、文部科学省からの派遣教員がいたりいなかったりする上、先生方の雇用や契約の状況によっても立場は違います。ただ「子供たちによりよい教育を行いたい」という願いは同じです。

二〇一九年度末から、コロナ禍に伴い、地域の施策や借用校等の状況により、補習授業校も休校等の対応を取らざるを得なくなり、大きなダメージを受けました。そうした中、全ての補習授業校の「希望」となったのが、AG5補習校チームです。

情報交換会は二〇二〇年の四月から始まり今も続いています。テーマは「学校運営」を始め、様々な立場の先生方が具体的な課題を解決できるように設定され、しかも実用的な内容なので選択の幅が広く、参加不参加についても特に制限はないので、気軽に参加することができます。

コロナ禍でオンライン会議が当たり前になりました。情報交換会で画面に映る先生方は国・地域や学校は

もちろん立場も違います。先生以外の学校関係者が参加する場合もあります。参加者が一つの画面にランダムに並び、時空を超えて同じテーマに向かってアイデアを出し合うのはとても素晴らしいことだと思います。対面での会議ではなかなかできなかったことです。ともすると一校だけの考え方に陥りがちですが、他を知ることで自校の課題が見えてきて解決に繋がる可能性もあります。

参加者みんなでよりよいものを創り上げていくことが情報交換会の利点でもあります。まずは興味のあるところから参加して、やがてその中心になっていくことも今後の発展に向けて大切なのではないのでしょうか。補習校チームでは、「情報交換会」の他にも先に触れた「学習活動計画作成・授業研究会」や「初任者研修会」等の事業を行っています。私も今回、縁あつて運営のお手伝いをするようになりましたが、やはり自分から関わり広げていくことが大きな力になると思います。

AG5のサイトを活用してください。さらに、できる範囲でAG5の取り組みに参加してみてください。私たちは全ての補習授業校が子供たちのためによりよい成果を上げることができるよう願っています。

# エー A ジー G ファイブ 5 だよ

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)



## 日本人学校オンライン教員研修

～コロナ禍前の環境整備・試行錯誤、そして合同研修の充実へ(マニラ、大連、青島の日本人学校)～

AG5運営指導委員・目白大学専任講師 近田 由紀子

オンライン会議・研修会等が当たり前になってきた今日この頃ですが、少し遡って振り返ってみると、どうでしょう。2020年、コロナ禍となり次々に起こる事態への対処に、先生方は試行錯誤し、できることから取り組もうと必死でした。本稿では、マニラ、大連、青島の日本人学校が、ITも研修内容も他校に先駆けて行ったオンライン教員研修への取り組みや、先生方の思い、参加者の感想などを紹介しながら、オンライン教員研修の成果や可能性について考えてみたいと思います。

コロナ禍以前、一部の企業等ではオンライン会議が日常的でしたが、一般的ではなく、教育現場ではほとんど行われていませんでした。

二年前のそのような中、二〇一九年度からAG5「日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のための日本語力向上プログラム」の開発において、オンライン教員研修にも取り組み始めたのが、マニラ、大連、青島の日本人学校です。

### コロナ禍前のオンライン会議・研修で築いた基盤

各校のAG5担当教師とAG5運営指導委員がスカイプやWeChat等を使ってプロジェクトの打ち合わせをしたのが、オンライン研修の始まりです。現地を訪問して対面での教員研修を実施する前に、各校の状況を把握し、実態に合わせた研修を企画・準備することができました。それぞれの国の事情により、使える通信アプリは様々でしたが、メールや電話では伝わりにくいことも、リアルタイムで顔を合わせて話すことにより、とてもスムーズに適切に進めることができました。

Zoomを使い始めたのは、十一月からでした。翌年二月にマニラ日本

人学校で開催される日本人学校合同研究会に向けて、オンライン参加者も想定しての取り組みでした。しかし日本人学校でのZoom導入には、

通信環境整備も含め課題が山積していました。Zoom機器、高性能カメラ、マイク等の機材を整えることから、オンライン授業公開・全体会に向けて何度もシミュレーションを重ね、二月末、初めての日本人学校合同研究会の開催まで漕ぎ着けました。

合同研究会当日は、中国でのZoom使用が不可となり、大連と青島の日本人学校の発表はWEBサイトで提示するのみと変更しました。台北・台中日本人学校、浜松市教育委員会とZoomでの情報交換会の後、マニラ日本人学校の授業公開(一・二・三年日本語学級、五年在籍学級は、各教室からZoomで配信し、他校の参加者は公開授業をリアルタイムで観することができました。全体会もオンラインで、文部科学省国際課長をはじめ、他校の参加者とマニラの教職員が学び合うことができました。この頃、世界はコロナ禍に突入。日本人学校の教育活動も巻き込まれていきましたが、日本人学校合同研究会に向けたIT環境整備や研修の実績が、この後、功を奏することになります。

### 試行錯誤をチャンスに変えた オンライン教員研修

二〇年度の教員派遣や対面での学校再開の目処が立たない中、マニラ、大連、青島の日本人学校の先生方は、前年度に整えたIT環境やノウハウを生かして、オンライン授業、ハイブリッド授業(オンラインと対面)を始めました。何もかも初めてのことでしたが、三校の先生方は、「AG5でIT環境を整備し始めた頃はとても苦労したけれど、そのおかげですぐにオンライン授業に取り組みすることができて感謝しています」とおっしゃってくださり、他の日本人学校に先駆けて様々な取り組みを始められました。

同時に、どの先生方も何が正解で何をしたら効果的なのか手探り状態にあることへの不安を抱えていました。さらに良い方法はないかと情報も強く求めていました。そこで、二一年六・八月の三カ月間に集中して、表1に示すオンライン教員研修を三校の教員に向けて実施しました。六月の情報交換会で各校の現状や課題が明らかになったため、その課題解決のために、七月にはマニラと青島の日本人学校の先生方が自主的に研修を企画・公開しました。Zoom



によるアクティブラーニングやハイブリッド型の授業は、当時本当に先駆けで、新しい取り組みに目を見張るものがありました。八月には、国内待機中の派遣教員がすぐに各校の取り組みに参加できるよう、日本語力向上プログラム開発に関する研修

を企画・実施しました。どれも必要に迫られての教員研修でしたので、先生方の意識も高かったように思います。また、赴任できずに国内待機を強いられていた派遣教員向けオンライン教員研修には、二十二名の教員だ

表 1

6/12	AG5テーマ2 マニラ、大連、青島の日本人学校情報交換会	<b>現状と今後の取り組みについて</b> ・オンライン授業・時間、開校の見込み、日本語指導の実際 ・日本待機の先生方との関わり・研修 ・児童生徒の困り感・つまずきの把握 ・ICTの活用ノウハウ
7/9・10	自主研修会：マニラ日本人学校主催	<b>Zoomでもできるアクティブラーニング</b> ・JamBoardを活用したグループワーク ・中学部1年生理科「水溶液の性質」授業公開
7/16	自主研修会：青島日本人学校主催	<b>多文化共生をテーマにしたハイブリッド授業公開</b> ・中学部3年社会科（公民的分野）「私たちの生活と文化」
8/2	AG5テーマ2 国内待機者派遣教員向けオンライン研修会	<b>AG5テーマ2 日本語力向上プログラムについて</b> ・マニラ、大連、青島の日本人学校の取り組み ・教科と日本語の統合学習実践例紹介（浜松市）

けでなく文部科学省国際課企画官も参加され、盛況でした。この頃のオンライン教員研修として、どのような学びがあったのか、参加者のアンケートから一部抜粋して紹介します。○コロナ禍にあってもオンライン対応をされ、学びを止めない姿勢が素晴らしいと思った。  
○画面上だが、挑戦や達成を経験した先生方のお顔を拝見でき、希望が持てた。  
○AG5の目的や我々の立場を確認できた。  
○それぞれの特色を生かし丁寧な取り組みをされていて参考になった。  
○生活言語に支障はなくても、学習言語能力に課題があることを初めて知った。  
○紹介された実践は、在籍学級の子供にとってもわかりやすいものになると思う。  
○このような研修の機会を与えていただき感謝している。すぐに実践してみたい。  
○派遣前の国の研修でもAG5の取り組みについて取り入れる必要があると思う。  
三カ月間という短期間でしたが、必要な時に必要なことを集中して研修できたのも、オンライン教員研修ならではの効果ではないでしょうか。

先生方が不安を払拭し新たな教育活動への展望をもち、日本人学校の教員としての使命を確固たるものにしていく姿がここに見られます。

**深まり広がるオンライン教員研修**

二〇年秋頃になると、三校の派遣教員も現地に赴き、どの学校も困難を抱えつつも、それぞれの状況に応じてオンライン・ハイブリッド・対面、様々な形態をとりながら、柔軟に教育活動を進められるようになってきました。ここに至って初めてAG5のテーマ2「バイリンガル・バイカルチュラル人材育成のための日本語力向上プログラム開発とそのための教員研修」を深められるようになりました。各校の実践も積み上げられ、成果も見え始めてきました。

そこで、三校だけではなく世界中の日本人学校にオンライン教員研修への参加を呼びかけて広く実践成果を発信したり、教員のネットワーク構築にも寄与したりできるよう、表2に示すようなオンライン教員研修を企画・実施することにしました。

一九年度は授業公開を含めたため平日に開催しましたが、二〇年度からは多くの教員が参加できるよう、週末に企画しました。すると、二〇



表2

2020/11/7	2020日本人学校における日本語力向上プログラム合同研究会 参加者：94人	<b>パネルディスカッション</b> ・バイリンガル・バイカルチュラル人材育成を目指した授業づくり ・ICTを活用した日本語力向上プログラムの実践と課題、今後の方向性 ・日本人学校教師のネットワーク構築
2021/5/22	第1回オンライン情報交換会	<b>対面・オンライン授業での効果的な日本語支援・学習活動</b> (マニラ、大連、青島以外の申込64人)
2021/6/19	第2回オンライン情報交換会	<b>バイリンガル・バイカルチュラルとしての成長を支える学級づくり</b> —表現活動を重視して— (マニラ、大連、青島以外の申込49人)
2021/7/17	第3回オンライン情報交換会	<b>多文化共生の学校づくり</b> (マニラ、大連、青島以外の申込52人)
2021/11/27	2021日本人学校における日本語力向上プログラム合同研究会	<b>バイリンガル・バイカルチュラル人材育成の汎用性のあるプログラムとは</b>

表3

AG5 日本人学校日本語力向上プログラム合同研究会 アンケート結果			
■前半の趣旨説明とパネリストの発表について		■後半のパネルディスカッションについて	
とても参考になった	38人	とてもよかった	38人
参考になった	14人	よかった	13人
どちらともいえない	1人	ふつう	2人

そこで、二二年度は多くの研修機会を設けることで参加者の願いに応えらるとともに、参加者との意見交換からより汎用性のある日本語力向上プログラムのヒントを得たいと考えました。現在、マニラ、大連、青島の日本人学校、それぞれが主催するオンライン情報交換会が実施され、各校の取り組みをもとにして日本語力向上プログラムについて深めていくところです。このオンライン情報交換会は、すでにAG5のWEBサイトで紹介している各校の実践事例

「もっと情報が共有したい・交流したい」という願いが強く示されているように思います。各地の教育現場での実際の困り感から、より切望する声が高まっていたのかもしれない。次のオンライン教育研修を望む声も多く、新たな取り組みに対する関心が高まっていることがわかります。

このアンケートを見ると、二〇年八月の国内待機中の派遣教員向けオンライン教員研修と共通する部分も多いのですが、「さらに追究したい」、「もっと情報を共有したい・交流したい」という願いが強く示されているように思います。各地の教育現場での実際の困り感から、より切望する声が高まっていたのかもしれない。次のオンライン教育研修を望む声も多く、新たな取り組みに対する関心が高まっていることがわかります。

年度の日本人学校における日本語力向上プログラム合同研究会には九十四人の参加者があり、いっきにネットワークが広がりました。三校以外の先生方もコロナ禍において、本当に困っていたのだと思います。参加された方々の声を、アンケート(表3)から一部抜粋して紹介します。

○「ここまでオンラインでできるんだー」という驚きを覚えるとともに、各日本人学校でチームを組んでの研究が素晴らしいと感じた。オンラインでもどの学校でも、子供たちの実態をできる限り把握し子供に寄り添った実践だった。

△ICTの課題として指摘されている活用するところ等勉強になった。いただいたアイデアをすぐに実践したい。今後の教育実践に向け展望が開けた。

△時間が短かった。このアンケートを見ると、二〇年八月の国内待機中の派遣教員向けオンライン教員研修と共通する部分も多いのですが、「さらに追究したい」、「もっと情報を共有したい・交流したい」という願いが強く示されているように思います。各地の教育現場での実際の困り感から、より切望する声が高まっていたのかもしれない。次のオンライン教育研修を望む声も多く、新たな取り組みに対する関心が高まっていることがわかります。

や成果のまとめを活用しています。参加者には事前に目を通していただきアンケートにも答えていただくことにより、意見交換の内容を焦点化して深められるようにしています。

[https://ag-5.jp/cms/ag5/common/pdf/theme2/Maria\\_book\\_2020.pdf](https://ag-5.jp/cms/ag5/common/pdf/theme2/Maria_book_2020.pdf)  
<https://ag-5.jp/cms/ag5/common/pdf/theme2/dairen2020.pdf>

[https://ag-5.jp/cms/ag5/common/pdf/theme2/Quinto\\_book\\_2020.pdf](https://ag-5.jp/cms/ag5/common/pdf/theme2/Quinto_book_2020.pdf)  
 また、意見交換の様子から、参加者もコロナ禍での教育活動に慣れてきたように見えます。もちろん今でも次々に起こる新たな課題への対応もあり、直近の情報を得たいお気持ちはお持ちです。さらにバイリンガル・バイカルチュラル人材育成という共通の視点から、以前より落ち着いた議論が深まっているように感じます。

これから十一月までに、さらなる実践とともに情報交換会での意見交換を参考にして、バイリンガル・バイカルチュラル人材育成の汎用性のあるプログラムについてまとめます。その成果を十一月二十七日の「二〇二一日本人学校における日本語力向上プログラム合同研究会」で発信し、参加者と協議する予定です。このオンライン教員研修にはAG5のWE

Bサイトから申し込めますので(<https://ag-5.jp/report/theme2/study/detail/132>)、ご関心のある皆様、ぜひご参加ください。

## オンライン教員研修の成果と課題、今後の可能性

オンライン教員研修は、コロナ禍において急速に充実してきました。その原動力は予測困難な状況に置かれた先生方の「何とかしたい」という切なる願いにあります。次々と襲ってくる困難な状況において教育活動も激変し、課題解決のために先生方が情報を求めていたことがプラスに働いたと言えるでしょう。

ネットワークも急速に広がりました。マニラ、大連、青島の日本人学校の実践成果を広く発信したいと考えていたAG5のメンバーにとって大変でしたが、振り返って見れば好機であったことがわかります。ともすると孤軍奮闘することになりがちな日本人学校の教員にとって、オンライン教員研修の幕開けは大きな転機であり、待ち望んでいたものでもあったと言えるでしょう。

しかしながら、迅速に情報を共有し意見交換をして教員同士のつながりが促進されることのみでは、オンライン教員研修の成果としては十分

ではありません。やはり、内容がもっとも重要です。

本稿で紹介したオンライン教員研修では、マニラ、大連、青島の日本人学校の日本語力向上のための実践や他地域の先進的な実践事例等が参加者の関心を高めたことがわかります。また、AG5のWEBサイトに掲載した実践冊子やまとめの活用は効果的でした。アンケートから参加者の実践への動機付けになっていることがわかります。

さらに、オンライン教員研修に向けての学校全体での取り組みや、三校が連携・協働して進められたことも成果と言えるでしょう。多くの先生方の活躍の場があり、実践に裏付けられた自信に満ちていた姿が印象的です。教師としての成長を実感できる場でもあったように思います。

一方、研修内容や方法にはまだまだ課題があります。「多様な地域の特色に合わせた応用ができる提案には至っていないこと」、「ICTに関する情報不足や課題の未整理」、「時間内に十分な協議ができていないこと」などです。参加者のニーズを汲み多様な研修が実施できるよう工夫する必要があります。

今後は、汎用性のある日本語力向上プログラムを提案できるよう研究

を進めるとともに、オンライン・ハイブリッド・対面の授業形態を意識したICT活用の課題、個別支援のバイカルチュラル人材としてのキャリア形成などについても幅広く取り上げていきたいと考えています。

また、広がりつつある教員のネットワークを国内や在外教育施設だけでなく現地校の教員へも広げたり、フォーマルな研修以外に交流できる場を設定したりすることができれば、面白い視点も得られそうです。オンライン教員研修がより魅力的なものとなり、各地の新たな実践につながる事ができるよう、積極的に企画・実施して参りたいと思います。



# エー A ジー G ファイブ 5 だよ

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)



## AG5の5年間と補習授業校のこれから

AG5 運営指導委員・海外子女教育振興財団 教育相談員 佐々信行

5年間にわたって続けてきたAG5プロジェクトが間もなく終わりを迎えます。この5年間に何ができたのか、そして、プロジェクト以後に何を引き継いでいけるのか、「補習授業校における日本語能力向上のための総合的なプログラム開発」について振り返ってみたいと思います。

### 「補習校チーム」で取り組んだ活動

最終年度にあたる二〇二一年度は、補習授業校関係の三つのグループが活動しています。

#### A. 補習校ネットワーク授業研究

「補習授業校における日本語能力向上」の具体的な目標は「日本語力の違う子どもたちが一緒に力を伸ばしていく授業」を作っていくことです。児童生徒の多様化に伴い、数年内に帰国する予定の子どもと当面帰国の予定のない子どもが並ぶのは普通のことになりました。一つの教室の中に日本から来たばかりの子どもと日本に行ったことのない子どもが一緒にいることさえあります。

「説明して分からせる」というタイプの授業では、どうしても「どこかのレベルに合わせる」ということになりがちです。ある子にとっては難しすぎる、ほかの子には易しすぎる、というのでは一緒に学ばせることはできません。

クラスを分けるといえるのは一つの解決策ですが、いくつに分けてもその中には力の差がありますし、「できるクラス」「できないクラス」とい

う発想になると、「できない」方はなかなか意欲的になれません。

そこで、子どもたちに日本語を使う活動をさせることによって力を伸ばしていくという発想の授業を工夫しようと考えました。体育の授業では、運動が得意でない子どもでもそれなりに体を動かして参加することができます。それは、授業が活動の組み合わせで構成されているからです。体育の授業が好きな子どもが多い理由の一つはここにあります。

言葉の学習には「聞く」「読む」「話す」「書く」の四つの領域があります。「聞く」「読む」では、「難しすぎてさっぱり分からない」という状態になると学習が全く進みません。しかし、「話す」「書く」の方は自分の力の範囲で何らかの表現をすることができます。ですから、授業の中に「話す」「書く」の活動を多く取り入れるのが良いと考えられます。

いわゆる、ラーニング・ピラミッドの考え方は、「グループ討論をする」「自ら体験する」「人に教える」などの活動をするとうまくとされています。科学的な検証はともかくとして、経験からくる実感としてはうなずけるところがあります。このような活動を取り入れるのも楽しい授業を作って

いくための有効な方策となります。子どもがじっと座っているのではなく、言葉を使う活動をする授業を作っていくことで、「日本語の力が違っても一緒に力を伸ばしていく」環境を前進させることは可能なのです。「日本語は無理、日本語は嫌い」と、補習授業校を去っていく子どもの数を減らすことができるのではないかと期待できます。

AG5の最初の三年間は提携校であるダラス補習授業校の先生方に、二〇年度からはダラスに加えて各地の補習授業校の先生方に授業を提供していただき「学習活動計画」を作成しました。作成過程の検討会や授業後の研究会では「補習校ネットワーク」に登録した世界各地の先生方にご協力いただいています。二一年度には登録者数が二五〇名を超えました。子どもたちの姿には、確かな手ごたえがあります。保護者からの「今までは補習校をいやがっていたけれど、この学習には楽しそうに取り組んでいました」という声は何よりの後押しです。

一九年度までに作成した学習活動計画は冊子にまとめて提供しています。その後のものも含めた詳しい報告はAG5のウェブサイトにありますので、ご参照ください。



・楽しく日本語を伸ばす補習授業校  
学習活動計画集



<https://ag-5.jp/cms/ag5/common/pdf/theme4/DallasPlanBook.pdf>

・AG5のウェブサイト



<https://www.ag-5.jp>

おりしも、新しい学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」がうたわれています。国内でもずいぶん前から「子ども中心の授業」や「アクティブ・ラーニング」というようなことが言われていますが、基本的な授業の形がそれほど変わっていないように見えます。

その理由の一つには、子どもの多様性がそれほど大きくない日本の学校では、教え込み型の授業でもそれなりに効果を上げることができるといえるように思えます。

否応なしに「主体的・対話的」な授業を考えなければならぬ補習授業校から、日本の学校に新しい風を送ることができるとは思いません。

二一年度には、補習校ネットの先生方に、授業研究のための授業提供

を呼びかけたところ、何人かの先生方が手を上げてくださいました。ベテランの方も、まだ経験の浅い方もいらっしやいます。授業を良くしていくために自主的に研究を進めていくという理想的な研究グループの基盤ができてきたと思われまます。

AG5終了に伴って「提携校」はなくなり、「補習校チーム」は解散となりますが、何らかの形でこの研究の場を継続していくことが望まれます。意欲のある先生方がいますし、必要性を理解してもらえれば環境も整ってききましたので十分に可能だと思います。

**B. 補習授業校初任者研修会**

私が教員になって最初に二年生を担当した時、痛感したのは、「小さい子に分かるように話すのは難しい」ということでした。子どもが言うことを聞かないのは言われていることが分からないからでした。教室へ行く階段を上る足が重かったのを覚えています。

補習授業校の先生で、自分がそうなることを予想していた人は少ないのではないのでしょうか。ほかにいないからと頼み込まれて引き受けることになった方もいるに違いありません。教員になるつもりで何年も準備

して来た人であつてもたいへんなのですから、いきなり教えなければならなくなつた苦労は相当なはず。本当はかわいい子どもたちが悪魔に見えることさえあるでしょう。

普通の学校であれば、初任者には研修の機会を計画的に設定して応援します。仕事を楽にするような情報や授業の技術などは、機会さえあればかなり伝えることができるのです。相談できる経験者がいれば解決できる問題も少なくありません。

しかし、一つ一つの補習授業校にはなかなかその余裕がありません。補習授業校の先生が集まって研修会を持つことはできないかという要望は以前からありました。図らずも、新型コロナウイルスの感染拡大によってオンライン会議を活用する環境が一気に進み、好機が訪れました。

二〇年度に、AG5「補習校チーム」のメンバーやダラス補習授業校などの経験豊富な先生たちが講師を務める形で「補習授業校初任者研修会」を実施しました。初めてのことで、先生たちの期待に十分応えるだけのものはできませんでしたが、それでも「助かった」「役に立った」という反響をいただきました。

二一年度は一年目の経験を生かし、参加者のみなさんにより積極的に参

加していただく形を工夫して実施しています。参加者同士の交流の機会も設けることができるようになりました。参加者数は七月末の時点で一八九名、その所属校は七八校（アジア五校、大洋州四校、欧州三〇校、北米三七校、中南米二校）です。

このような研修会が、補習授業校の先生方にとって大きな助けになることは疑いありません。「補習校ネット」の授業研究と同様、AG5終了以降も続けていけるように工夫していかねばならないと思えます。

**C. 補習授業校情報交換会**

それぞれの回にテーマを設定し、関心のある方に自由に参加していただくオンラインのミーティングです。二〇年四月に始めてから、すでに三〇回以上を数えます。メーリングリストには三〇〇名以上の補習授業校の教員や関係者などが登録しています。

テーマによって多い時には一〇〇名以上、通常は四〇名から六〇名くらいが集まります。「聞きたいこと」を出し合い、資料を提供し合つて一時間ほどの交流を持ちます。

ここで知り合った先生たちがグループを作り、二〇年度には補習授業



校や日本人学校を結んで「SDGs」の研究會が、二一年度には遠く離れた幼稚園児たちが一緒にオンラインで楽しむ交流會が実現しました。

リクエストに応じてテーマを設定するので、その時期に必要な話題が話し合われます。オンライン授業の進め方や、登校できない中での学校行事のあり方など、「この会で具体的な方策を学んで助かった」という声が多く参加者から聞かれました。時間をかけて作り上げた行事のプランを提供してもらい、実際に行った結果まで聞かせてもらえれば、短い時間で自分の学校に合った計画を立てることができません。

具体的な情報を得るだけでなく、世界各地の補習校関係の人たちと知り合うことも大きな収穫になっています。すぐに答えが見つからなくても、同じ願いをもってがんばっている人たちの顔を見て声を聞くことは、元氣と勇氣の源になります。

この二年間は、新型コロナウイルスに関連してたくさん初めての課題に対応しなければなりません。ウイルスの問題が落ち着いたとしても、新しい課題はいつでも目の前に現れます。聞きたいときに知りたいことが聞ける機会を、AG5終了以後も何らかの形で継続していけ

たらと思います。

このほかに、自由な交流とAG5からの広報のために立ち上げた「補習校教員交流Facebook」があります。こちらは三三〇名余りのメンバーがありますが、少しずつ増え続けています。いろいろな角度からの情報交換され、補習授業校の直接の関係者でない方もメンバーになっています。補習授業校を広く知ってもらうためにも一役買っていると思われます。引き続きこの輪が広がっていくことが期待されます。

#### ・補習校教員交流Facebook



<https://www.facebook.com/groups/1664125650300837>

#### 補習授業校のこれから

AG5の開始に先立ち、アメリカの補習授業校教員を訪問して先生方と話をする機会がありました。その時に最も強く言われたのが「先生同士の交流の機会がほしい」ということでした。小さな補習授業校では同

じ学年を教える先生が一人という場合もあります。同僚の先生がいたとしても限られた時間の中では授業時間以外に交流することもままなりません。事情は私たちにもよく理解できました。

ビジネスの世界ではオンラインのミーティングがすでに活用され始めていました。私たちもその可能性を認識して活用を試みましたが、今一つハードルが高いものであります。ところが、コロナへの対応でみなさんが一気にオンライン会議に慣れ、システムも使い勝手が良くなり、離れたところにいる人が集まって話すことが日常になりました。

今ももう、その気になれば物理的な距離を気にすることなくつながって力を合わせることができます。補習校の先生たちにとっては、新しい時代の到来です。この新しい環境を積極的に活用して、一人で悩むことなくつながりを広げていっていただきたいと思えます。私たちも、AG5終了後も引き続きそれをお手伝いできるように工夫してまいります。

私が最初に補習授業校で教師としてお世話になったのは一九七四年のことですが、そのころと比べると、世界の補習授業校の様子はだいぶ変わりました。今では、近い将来日

本に帰国する予定の子どもたちだけでなく、いろいろな立場の子どもたちが学んでいます。

日本語の力が違う子どもたちが一緒に学ぶことは、補習授業校に難しい課題をつきつけてはいるのですが、その課題をいくらかでも克服していくことで、補習授業校の新しい可能性が見えてきます。

AG5で活動した五年間に会ったたくさん先生の先生方は、目の前の子どもたちの学びの環境を少しでも楽しく充実したものにしようとして懸命授業に取り組んでいました。その姿は本当に心強いものです。

多様な人々がお互いの価値を認め合い、多様な子どもたちがともに学ぶことは、これからの世界にとってとても重要な課題です。残念ながら、今の日本の学校は、この点に関してはずっと世界に誇れるような状態ではありません。しかし、日本国内でも、海外でも、いろいろな立場の日本人がより望ましい未来に向かって努力しています。補習授業校の新しい姿を求めていく活動がその運動の一つの力となることを信じています。補習授業校で育っている子どもたちが、将来を担う大きな希望であることもまた、間違いありません。

# エー A ジー G ファイブ 5 だよ

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)

## 「日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発」の5年間を振り返る

AG5 運営指導委員・海外子女教育振興財団 教育相談員 植野美穂

AG5プロジェクトが開始した2017年度、テーマ「日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発」の研究提携校は香港日本人学校香港校小学部の1校でしたが、2019年度からシンガポール日本人学校とパリ日本人学校が加わり、探究学習のプログラム開発とそのための教員研修に取り組んできました。今月号では、これまでの5年間の実践について振り返ってみます。



「日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発」のこれまでの活動

### (一) 香港日本人学校香港校

香港日本人学校香港校小学部では、二〇一六年度に「グローバルクラス」を立ち上げ、広い視野、論理的思考力、適応力、自己表現力などのグローバル型能力と英語力を兼ね備えた人材を育成するための実践に取り組んできました。

「グローバルクラス」は、小学四・五・六年生を対象とし、各学年の学級担任は日本人と英語のネイティブスピーカー・教員の二人体制で、日常的に英語に触れることが可能な環境となっています。

このクラスでは、英語の授業を三人の教員で担当していることを生かして、児童の英語力に合わせたグループレッスン(ワーク)を多く取り入れ、英語以外にも算数、理科、図工は英語で学び、英語力向上に向けた取り組みを行っていることが特徴です。

また探究学習を核にした「グローバルスタディーズ」の取り組みも、「グローバルクラス」の特徴です。「グ

ローバルスタディーズ」は、「国際バカロレア(IB)」のレススンプランである「探究の単元」(Unit of Inquiry)を参考にした探究サイクルを学習過程の柱にし、各教科、特に社会科と指導内容を関連させながら、世界的な課題について学期に一つのトピックで探究学習を行い、調査力、分析力、論理力、プレゼンテーション力などの能力を高め、グローバル市民としての主体性を育むことを目標としています。

学年にまたがる単元構成、評価法、指導法の見直し等、「グローバルスタディーズ」のプログラムの改善と開発を毎年行い、一九年度にはこれまでの研究の成果をまとめて「グローバルスタディーズ単元デザインの手引き」を作成しました。

教員の入れ替わりが頻繁な日本人学校にとって、学校独自の科目の質を維持・向上することは大きな課題です。

そこで、新しく赴任してきた先生が「グローバル・スタディーズとはどのようなものか」、「何を大切にしているのか」、「どう展開していくのか」を理解して担当できるように、学年・学期ごとの「カリキュラムマップ」も作成しました。

二〇年度には、四年から六年までのそれぞれの学年で、探究学習を通してどこまで調査力やプレゼンテ

ション力等の力(スキル)を身に付けさせていくのか、評価法について検討し、「グローバル・スタディーズ」の評価のためのATL (Approaches to Learning: 学習のアプローチ方法)スキルをもとにしたルーブリック指標」を作成しました。

探究学習では、教員の主観的な評価に陥らないように評価基準を明確に示すことが大切ですが、学年に沿ったルーブリック指標を作成することで、目標とする児童の姿が明確になり、系統的な指導の実現が可能になりました。

またルーブリック指標を事前に児童に示すことで、「これからどのような学習をするのか、何を目標として探究をまとめていけばよいのか」、子どもたちの自己評価につなげられるようになりました。

香港日本人学校香港校の中学部では、総合的な学習の時間を利用して「探究学習」の単元開発に取り組んでいます。また、English Classroomの作成と発表」を通して、思考力、判断力、表現力を高めています。

二〇年度はコロナの影響で予定していた活動が行えませんでした。年度後半には前年度の教員研修をもとに、「探究学習」に生かせる反転学

習に積極的に取り組みました。またICT機器を活用して、香港の日本語学科の大学生に、中一では「香港ガイドブックづくり」、中二では「香港の中の日本」についてリサーチしたことを発表し、意見交換を行いました。

## (二) シンガポール日本人学校クレメンティ校・同校チャンギ校

シンガポール日本人学校では、総合的な学習の時間に、「シンガポール」という国・地域を題材として、特色ある現地理解教育の実践を行ってきました。

一八年度に「持続可能な未来社会を実現するための探究力の育成」を重点課題の一つに掲げる「シンガポール日本人学校グローバル人材育成大綱」が策定・施行され、これまでの総合的な学習の時間を、小学部では「探究科基礎」、中学部では「探究科」と改称し、現地理解教育を中心に「持続可能な社会のための教育(E・S・D)」の視点を取り入れた探究学習を推進するようになりました。

またAG5の提携校となった一九年度からIBの要素を取り入れて、シンガポールが抱える子どもにとっての身近な問題を切り口に、地球上で起きているさまざまな課題を解決

することの重要性について認識させ、課題の解決につながる価値観や行動などの変容をもたらす研究を進めています。

二〇年度は、コロナ感染の影響で四月よりシンガポールはロックダウン状態となり、学校も閉鎖されました。シンガポール日本人学校ではオンライン授業体制の構築と開発に全ての時間を注ぎ、AG5の研究は一時停止せざるを得なく、八月に研究を再開しました。

児童の通常登校が開始された後も、学校現場を取り巻く環境がロックダウン以前の姿に戻る目は立たず、従来型の授業形態、学校行事、校外学習の実施は困難な状況になったため、探究学習のカリキュラムには全内容を練り直す必要が生まれました。

クレメンティ校ではロックダウン中に培った「在宅オンライン授業」を生かし、各学年の教師が校外学習に行く予定だった施設に赴き、音声解説も交えた動画を作成したほか、ゲストティーチャーが出演する動画も用意してオンライン授業で活用し、校外学習と同等の効果を上げられる実践を行うことができました。

また在宅という強みを生かし、家庭やその周辺での臨地調査をオンライン授業で行い、探究的な学びの実

践の幅を広げたほか、オンライン授業を互いの成果発表の場として活用することで、学級・学年の垣根を越えた交流が活発になりました。

さらに十月から十一月にかけて、国内の研究協力校である東京学芸大学附属大泉小学校とクレメンティ校とで、住んでいる互いの地域を比べ、共通するよさやちがいを見つけることをねらいとした探究に関する交流学習を行いました。

時差や学習進度の関係で日程調整が難しいという課題がありますが、各学校の児童の発表は事前に動画撮影をしておき、空いている時間に視聴することで多くの時間を交流に充て、互いの発表を通して比較しながらよさやちがいを見つけることができました。

IBの視点を取り入れて探究学習のカリキュラムを構築するには、全教員がIBプログラムについて理解する必要があります。チャンギ校では、IBのPYP認定校の先生を講師に招き、「大人の探究」のプログラムを全七回オンラインで受けました。

このプログラムでは、前半は学習者として、後半は授業者として参加することで、学び手である子どもが直面するであろう「つまずき」や「悩み」を実感することができました。

## (三) パリ日本人学校

研修を受けたことで、PYPでは「具象と抽象の往復」を繰り返しながら高度な概念理解を図っていることを体験的に理解でき、教師自身が物事を抽象化する思考力を鍛える必要があることに気付くこともできました。

パリ日本人学校では、「世界で活躍するグローバル人材の育成」を研究主題に設定し、①本校におけるグローバル人材育成に必要な資質・能力②探究単元の開発推進のための対話的で深い学びの実現と学級づくり③単元づくり(探究単元)のためのカリキュラムマネジメント④汎用性のある小中一貫探究単元の開発(「IBの理念を参考」を研究の柱として、一九年度から探究学習のカリキュラム開発に取り組みできました。

初年度には、汎用性のある小中一貫探究単元の開発に向けて、小学部では「水」を、中学部では自己の生き方を考えるために「フランスと私」をテーマとする探究学習に取り組みました。

二〇年度はコロナ禍によりパリ日本人学校も学校閉鎖となり、当初予定していた授業実践ができなくなつたため、学習支援企画として日本国内の五つの研究機関(情報通信研究機構(NICT)、宇宙航空研究開



発機構（JAXA）、新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）、科学技術振興機構（JST）、日本原子力研究開発機構（JAEA）によるオンライン講座「科学を知ろう〜今と科学とわたしと未来〜」をもとに探究学習を行いました。

オンライン講座を聞いてメモしたことをもとに、子どもたちは「学びの地図」や「新聞」を作成し、グループ交流・学級交流・ブロック学年交流などの「新聞交流会」を通して再度自身の考えを深め、「提言書」を作成しました。「パリ日提言フォーラム」では、全学年・保護者・各研究機構の方々に向けて、根拠を明確にしながら自分の考えを発表しました。

IBの学習者像を具体的実践で育成すべき資質・能力にしたものとして「二十一世紀型スキル」が世界各国で注目されていますが、パリ日本人学校の実践は、まさに「二十一世紀型スキル」の育成を図っており、それがグローバル人材の育成につながるようになっていきます。

今年度は、次期オリンピック・パラリンピックの開催地がパリであることを見据えて、「今とオリパラとわたしと未来」をテーマに、「二十一世紀型スキル」の育成を目指した探究学習のカリキュラム開発、授業実

践を進めます。

「日本人学校における「探究学習」のすすめ〜実践ガイドブック」

これまでの「探究学習」の実践を他の日本人学校でも広く活用できるようにするために、昨年度、探究学習とは具体的にどのようなものなのかを示した解説書として、『日本人学校における「探究学習」のすすめ〜実践ガイドブック 第1部理論編』という小冊子を作成しました。

この小冊子の内容は次の五つの章に分かれており、「探究学習」の基本的な概念や考え方が詳しく紹介されています。

- 第1章 なぜ「探究学習」なのか
- 第2章 「探究学習」とは
- 第3章 日本人学校で探究学習を行うメリット・デメリット
- 第4章 「探究学習」の評価
- 第5章 「探究学習」の具体的手順（授業の作り方）小学校編

なお、この『日本人学校における「探究学習」のすすめ〜実践ガイドブック 第1部理論編』は、AG5のウェブサイトに掲載していますので、ご参照ください。

<https://ag-5.jp/report/theme1/study/detail/138>

今年度は、第1部理論編をもとにして、これまでのAG5の研究携携校の実践を紹介する『日本人学校における「探究学習」のすすめ〜実践ガイドブック 第2部実践編』を作成します。

第2部実践編では、香港、シンガポール、パリの各日本人学校の探究学習構想、子どもの問いの生成の様子や反応を記した授業記録、探究学習を進めていくための教員研修・組織づくりを紹介する他、第1部理論編の内容が各学校の実践でどのように反映されているかを解説します。

『日本人学校における「探究学習」のすすめ〜実践ガイドブック』の第1部と第2部を合わせて読むことで、これからの教育の中核として、日本国内はもとより世界各国で求められている探究学習の考え方、学習スキルを育成する探究学習の授業づくりのヒントが得られます。

両冊子が国内外の多くの先生に活用されることを期待しています。なお第2部実践編も、AG5のウェブサイトにて公開する予定です。

今後に向けて

香港、シンガポール、パリの日本人学校の先生方は、探究学習のカリ

キュラム開発を進めるための研究に意欲的に取り組まれ、探究学習の指導に関するスキルを高めるとともに、他の学校の実践にも役立つプログラムを開発しました。

それぞれの日本人学校で扱う探究学習の学習題材・トピックは学校ごとに違いますが、香港日本人学校の呼びかけで昨年十二月に香港とシンガポールで探究学習に関する情報交換会を開きました。

今後も、このような学校間の情報交換会を通して、他校の先生から教材や指導に関して有益なヒントをもらったり、探究学習のカリキュラム・デザインの諸課題を検討したりすることが望まれます。

AG5が終了してからも、日本人学校と国内の学校等が継続的に連携し、探究学習を普及させるための教員研修及び授業実践が進められるよう、仕組みを構築していきたいと考えています。



『「探究学習」のすすめ』



# エー A ジー G ファイブ 5 だよ

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)



## AG5テーマ2「日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発」

AG5 運営指導委員・日白大学専任講師 近田由紀子

2017年にAG5がスタートする以前から日本人学校に在籍する子供の多様化は進んでおり、日本人学校においても日本語指導が必要な児童生徒への支援が欠かせないものとなっていました。私たちは、表題のテーマを設定し、日本語指導が必要な子供たちはもちろんのこと、他の子供たちや先生方の成長も願ってプロジェクトに取り組んでまいりました。本稿ではこれまでの取り組みを振り返り、その概要と成果、今後に向けての期待などを紹介したいと思います。

国際結婚や長期滞在の家庭の子供など、日本語指導が必要な子供たちは、バイリンガル・バイカルチュラル人材としての活躍が大いに期待される子供たちです。

またこのような子供たちと共に学ぶことは、他の子供たちや先生方も多様な価値観を学ぶ絶好の機会となると考えてこのプロジェクトに取り組んでまいりました。

### 二〇一七年度からの経緯

二〇一七年度のAG5始動と共に、台湾の台北、台中、高雄の日本人学校が効果的な日本語指導プログラムの開発に取り組みました。

その成果は、『日本語補習クラスのための学習活動案集』台北日本人学校の実践から『在籍学級での日本語支援の視点を取り入れた授業づくりの手引き』台中日本人学校の実践から、『高雄日本人学校における二〇一九年度の取組み報告資料』にまとめられ、AG5のWebサイトに掲載されました。

二〇一九年度～二〇二二年度は、台湾の三つの日本人学校の成果を発展させる形で、マニラ日本人学校を拠点に大連日本人学校と青島日本人学校が連携・協力して「総合学習型日本語指導」に取り組みました。

総合学習型とは、教科横断型の日本語指導、学級での多様な学び合い、バイカルチュラルの視点を生かした多文化共生の学校づくり等を含めた日本語指導です。詳細については、次にご説明します。

### マニラ日本人学校・大連日本人学校・青島日本人学校による先進的な取り組みへ

二〇一九年度以前より、マニラ日本人学校小学部では週一回放課後に日本語学級を開設して指導をしていました。また青島日本人学校では日本語指導担当教員による課外授業・個別指導・入り込み指導を行っていました。大連日本人学校では在籍学級で日本語の支援を行っていました。しかし、それぞれに指導内容や指導方法についてさらに改善できるのではないかという課題意識も持ちました。

そこで従前の仕組みを生かしつつ、「日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発」というテーマのもと、各学校での指導内容や指導方法、校内体制の整備などの改善を含め、総合学習型日本語指導の先進的な取り組みに挑戦していただきました。

その結果、三校の取り組みには、おもに次のような共通点があることがわかりました。

- ・三校間の積極的な情報交換・交流
- ・日本語指導担当の校務分掌への位置づけや学校体制の整備、校内研修との関連付け
- ・対象児童生徒のきめ細かい実態把握と評価

「日本語と教科の統合学習」を軸にした日本語指導（日本語を教科の学習場面と切り離さずに指導する。）

- ・具体的な日本語支援（体験的な活動や操作活動の重視。モデル文やキーワード等の提示。）

バイカルチュラルの視点を生かした授業実践（現地素材を使ったり、在留国と日本、両国の文化や価値観等について触れたりすることで、多様な価値観や広い視野から子供たちの学びが深まる。自己肯定感の高まりや自信につながる。）

日本語学級または日本語指導担当者、在籍学級担任・教科担任との連携

そして、このような共通の取り組みに加え、各校ではそれぞれの地域や学校の特徴を生かした実践をさらに進めていきました。

## マニラ日本人学校

### 日本語学級での教科横断型の先行学習による成果

小学部では課外に、学級担任が日本語指導の必要な児童に対して、国語、算数を中心に、各学年の実態に合わせて教科横断型の日本語指導に取り組みました。

週一回の指導でも、教科横断型の学習をすることによって、在籍学級の学習と関連する内容を多く取り入れることができます。また在籍学級での学習にのぞむ前に、体験的な活動も取り入れながら先行して学習することで、内容への関心・意欲が高められました。

このような先行学習によって、在籍学級での学習参加も促され、理解力の向上や内容の定着も図られたそうです。

日本語学級における教科横断型のカリキュラムマネジメントによる先行学習は、担任の先生方という利点を生かして、子供の実態に合わせて無理なく行うことができたと考えられます。

### 在籍学級での日本語支援・バイカルチュラルの視点を取り入れた授業

一方、在籍学級の授業では、日本語学級（先行学習）とのつながりを

意識した学習を実践しました。日本語学級での学習経験を踏まえた授業展開や日本語支援を積極的に進め、子供たちが在籍学級でも安心して授業に取り組める工夫があちこちに見られました。

また、現地語が得意な子供による現地の方へのインタビューを取り入れたり、日本とフィリピン両国の文化に触れることで課題を自分事として深く考えたり、学んだことを実践へつなげたりと、子供たちが活躍する場も次々と広がりました。

コロナ禍により今もマニラ日本人学校ではオンライン授業が続いています。上記のような取り組みは、各学年の先生方、全学年の先生方のチームワークがあつてこそ成り立っています。

実践成果は、『日本語学級・在籍学級での教科横断的な日本語指導』マニラ日本人学校の対面・オンライン授業の実践から』という冊子にまとめられ、Webサイト <https://ag5.jp/report/theme2-2/study/detail/133> にも掲載されています。

この冊子は、学習活動計画と評価を中心に児童の成果物や教材の紹介もあり、参考資料として国内外で活用されています。

## 大連日本人学校

### 子供たちの自己肯定感を高める学校・学級づくり

校務分掌に位置づけられたコーディネーターが日本語指導の課題を校内研修や研究主題と関連付けたり、研修推進委員会を効果的に活用したりして、学校全体の教育実践を促しました。

校内の研究主題と関連させることで、支援的な学校風土という基盤のもと、子供たちの自己肯定感を高める学校・学級づくりができたそうです。

以前の大連では、日本語指導が必要な子供たちは、学年が上がるに連れて消極的になる傾向が見られたそうです。違いを受け入れ互いに認め合い、子供たちが自信を深められるような支援的な学校・学級にだけだけ支えられていることでしょう。

### 個別の指導計画と評価

DLA 語彙チェックや、「特別の教育課程」参考資料に示されている「目標項目」の活用、表現に関する意識や自己肯定感についてのアンケートの実施により、個々の実態把握やゴールが明確になったそうです。

学級担任が個別の指導計画を作成し指導に生かすと共に、学校全体と

して小学部・中学部の九年間の発達を見通しての実践の図式化も行って共通理解を図っていました。

また評価には、振り返りなどの成果物を生かしたポートフォリオ、授業へ参加する様子（日本語力・積極性）の記録、児童生徒の自己評価も活用しています。

今後は、より丁寧で効果的な指導や評価ができるよう、特別支援教育との連携も図りながら進めていくそうです。

### 表現活動を重視した在籍学級での日本語指導

確かな日本語力の定着・子供自身の良さを発揮する学習活動として、特に表現活動に力を入れているのが大連日本人学校の特徴です。表現支援としてのモデル文の提示や、教え合い・認め合う学習活動の設定に加え、ICTの活用やコミュニケーションスキル、ソーシャルスキルなども取り入れています。

## 青島日本人学校

### 多文化共生の学校・学級づくり

日本語指導担当教師が校務分掌に明確に位置づけられると共に、テーマを学校の校内研修と関連させて、全教職員で「多文化共生の学校づくり・学級づくり」に取り組んでいる

のが青島日本人学校の特徴です。

在籍学級担任は、多文化共生や日本語指導の視点を入れた学級経営案を作成しています。全児童生徒を対象にしたアンケートでは、日本語指導の基盤としての支援的な風土ができていくかを把握したり、生活面や学習面での日本語に対する困り感を把握したりしています。

### 多様な学び合いを支える日本語指導

「課外の日本語教室の指導」、「取り出しによる個別の日本語指導」、「在籍学級での入り込み指導」により、在籍学級での多様な学び合いができるよう支援しています。

学習内容は、日本語指導担当教師が在籍学級担任や教科担任と相談して決定し、「日本語と教科の統合学習」を中心にしてICT機器も積極的に活用しています。

さらに「個別の指導記録」として学習活動や指導内容を日本語指導担当者が毎時間記録し保存することで、継続して指導する効果を上げています。

また保護者との連携も大切に、日本語教室入級前の事前説明、個別懇談時を利用しての日本語指導の面談も実施しています。

### バイカルチュラルの視点を取り入れた授業

子供のルーツのある国からきっかけをつくる授業が効果を上げました。例えば、ルーツのある国の絵本や文化の紹介などです。

青島日本人学校には中国だけでなく、韓国や他国にルーツを持つ子供がいます。その多様性を生かして授業を展開しました。日本と諸外国の文化を比較し共通点や差異点を探る学習は自分のルーツとの関わりがあることから、より主体的に取り組んだそうです。

またオンライン交流として、日本の小学校との交流、企業訪問、卒業生との交流などを通して視野を広げていました。

実践成果は『多文化共生の学校づくり』青島日本人学校の実践としてまとめられ、Webサイトに掲載されています。

<https://ag-5.jp/report/theme2-2/study/detail/128>

### オンライン日本人学校教員研修とネットワーク

これまで紹介してきた各校の実践は、個別のアドバイスではうまくいきません。八月号のこの欄で詳細をお伝えしたように、教師のニーズに応じた研修が必要でした。

日本語指導については、国内の外

国人児童生徒等教育でも同様ですが、先生たちは基本的な考え方やノウハウを学ぶ機会を持っていないのです。ですから、赴任前、赴任直後、赴任中、それぞれの段階で、計画的に研修や情報交換会を実施しました。

先生方は、実践しながらも「これで良いのか、大丈夫か」と常に不安を抱えています。コロナ禍においては、まさに試行錯誤の連続でした。このような状況において、他校の実践を知ったり、悩みや課題を共有したりできることが大きな強みになったようです。

マニラ、大連、青島の日本人学校は常に情報を共有して共に進もうとしていますし、オンライン研修会によって日本人学校教師の輪も広がっています。

日本語指導担当は一人体制のところが多く校内で孤独感を感じやすいのですが、オンライン研修会を抛り所にして頑張っているという声も聞きました。様々な理由はあっても、先生たちのネットワークが力になっていることを感じます。

### 今後に向けて

最終年度の成果として、「汎用性のある日本語力向上プログラム」を提案します。これはマニラ、大連、

青島の日本人学校が実践した成果のうち、情報交換会等のアンケートも参考にしながら、他の日本人学校にも使えるような体制づくりや、カリキュラム、連携・協働の仕組み等を紹介するものです。

十一月二十七日、マニラ日本人学校主催の合同研究会にて、提案します。合同研究会では参加者と意見交換をすることで、「汎用性のある日本語力向上プログラム」をブラッシュアップする予定です。また当日は他の日本人学校や国内の中学校の取り組みなども紹介します。ご関心のある方はぜひご参加ください。

<https://ag-5.jp/report/theme2-2/study/detail/132>

今後、「汎用性のある日本語力向上プログラム」や広がりつつある教師のネットワークを活用しながら、各地の日本人学校でより魅力的な実践が行われることを期待しています。また現在赴任中の先生方が、帰国後はそれぞれの経験を生かして国内でのグローバル人材育成のリーダーとして活躍されることを願っています。



# エー A ジー G ファイブ 5 だよ

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)



## パラグアイ日系社会とアスンシオン日本人学校の絆を結ぶ AG5プロジェクト

パラグアイ現地コーディネーター 平岩佐江子

南米大陸の真ん中に位置し、「南米のハート」と称されるパラグアイ共和国。現在の人口はおよそ735万人（パラグアイ国家統計局、2021年推計値）ですが、1980年までさかのぼると318万人（世界銀行のパラグアイ国データ）。ここ数十年でパラグアイは人口が倍以上に増加し、首都アスンシオンでは新市街を中心に建設ラッシュ、交通量も格段に増えています。AG5プロジェクト最終年度を迎える今、グローバル化と近代化が急速に進むパラグアイで、「日本語を学ぶ意義」、そして「日本人がかつてパラグアイにやって来た史実から学ぶ『移住学習』を進める意義」とは何かを考えてみます。

### パラグアイの日本語教育事情

現在パラグアイにはおよそ七〇〇人の日系人がおり（二〇一七年日系人人口センサス）、パラグアイ国内にある九校の日本語学校（以下、日本語校）では、今年度は六五〇人ほどの児童生徒に対して、平日の午後や土曜日の授業が行われています（二〇二一年現在、チャベス日本語校は休校中）。その他、非日系児童が多く通う私立学校（日本パラグアイ学院、ニホンガッコウ、三育学院）でも日本語が学ばれています。

日本からは一番遠い、地球をぐるりと半周した反対側にある国で、三歳児クラスから「あ・い・う・え・お」を学んでいたり、小学生や中学生では日本語能力試験や日本語スピーチコンテストに挑戦したりする子どもたちがたくさんいるのです。私の子どもたちもパラグアイ生まれの日系人として、アスンシオンの日本語校に通って日本語を勉強しています。

戦後移住者が多く、日系一世の方々がまだまだご健在のパラグアイ日系社会では、総じて日本語レベルが高いと言われています。しかし二〇二一年には日本人移住も八十五周年を迎え、世代交代が進む中で日本語教師でも二世、三世の方が多くな

り、児童生徒は三世、四世の世代へと移り変わってきています。

パラグアイ現地のスペイン語学校の教育内容も充実してきており、以前は半日だったスペイン語学校も全日になるなど、スペイン語に触れる機会が増加し、家庭でのスペイン語の使用率も高まっています。

日本語を何とか継承していきたいという保護者や先生方の切なる願いは、時代の変遷とともにますます難しくなっていると言えます。

### 日本語学習、移住学習の意義

日系人の子どもたちにとって日本語や日本文化を学ぶことは、自分自身のルーツを学ぶことにはかなりません。そして、スペイン語と日本語の両方が話せるバイリンガルになれば、未来への大きな投資となります。

グローバル化が進む現在では、人やモノの移動が昔に比べてはるかに簡単になりました。子どもたちがパラグアイと日本を行き来する機会も、これからたくさんあるでしょう。そんな今日だからこそ、単なる言語としてではなく、自分自身のアイデンティティを形成する一部として、日本語を学んでほしいと思います。また、はるか昔に祖父母世代が体

験したパラグアイへの移住について学習することは、自分たちの今の暮らしの成り立ちを理解することにつながります。

私が初めてパラグアイにやって来たのは二〇一一年で、こちらに住んで足掛け十年が経ちますが、その間、日本人であることで不利益を被ったり、あからさまに差別されたりした経験はまったくありません。

誠実で勤勉な日本人は、パラグアイでは敬意を持たれており、その立て役者は開拓者としての日本人移住者なのです。

過去にどのような移住の歴史があり、そこにはどんな苦労や努力が隠れているのか、パラグアイ社会に受け入れられるために日本人がどのような貢献をしてきたかを、ぜひ学んでもらいたいです。そのような文脈で日本語学習や移住学習を進めるのはとても意義があると思っています。日系児童生徒たちは、まったく異なる価値観、言語、文化を子ども頃から自然に体験できます。パラグアイと日本両方の文化を知る日系人は、両国をつなぐ架け橋になれる存在だと思います。それはアスンシオン日本人学校（以下、日本人学校）で学ぶ児童生徒にも、同じことが言えます。

## 移住学習教材 「パラグアイ移住かるた」

AG5プロジェクトでは、日本人・日系人の子どもたちが日本人移住の歴史について楽しく学べるような教材を多数開発してきました。

二〇一八年に「パラグアイ移住すごろく」、二〇一九年に社会科副読本『わたしたちのパラグアイ 第三版』、二〇二〇年に「パラグアイ移住かるた」と『わたしたちのパラグアイ 第三版 活用事例集』を作成しましたが、このうち、特に思い入れのある「パラグアイ移住かるた」についてご紹介します。



読み札の川柳は、すべて日系人の方々や、日系の児童生徒の作品です。その多くは、パラグアイ日系老人クラブ連合会が実施しているシルバー川柳コンクールの応募作品の中から、移住に関して詠ま

れた句を使用させていただいたものです。アスンシオン日語校の児童生徒の作品もあります。ご家族も手伝われて、楽しんで詠んでくださったそうです。

さらに、アスンシオン日語校の関尚子校長先生のお母様の関淳子先生が、有志としてたくさん句を詠んでくださいました。一九三六年八月十七日にラ・コルメナ移住地に最初に入植された十一家族八十一名の一員で、移住当時一歳半だった方で、どの句も、ご自身やご両親の体験を心豊かに詠まれており、その当時の情景が心に思い描ける素晴らしい作品だと思えます。

絵札は、昔の写真を使いました。すべての移住地から写真を集めるようにしたこと、白黒の写真ばかりにならないよう、半分ほどはカラー写真にしたことがポイントです。

ジャンルに潜んでいたというジヤガーの写真や、移住地に向かう移住者たちが乗った昔の汽車の写真といった、子どもたちの興味を引きそうな写真も入れました。

写真集めにも、パラグアイ各地の皆様のご協力をいただきました。パラグアイ日本人会連合会をはじめとして、各移住地の日本人会、各日語校の先生方、イグアスやピラポの移

住史料館や農協、そして有志の方々から、当時の貴重な写真をご提供いただきました。中でも、ラパス移住地にお住まいの渡辺稲子先生は、扮装したり、生徒さんに演技を依頼してくださったりして、当時の様子を再現した写真を何枚も撮影してくださいました。

絵札の裏面には易しい日本語で解説文を付けて、漢字にはルビをふりました。日本人学校の加藤雅亮前校長先生が丁寧に文章をチェックしてください、内容についてはパラグアイ日本人会連合会の菊池明雄事務局長と、作成当時パラグアイ日系老人クラブ連合会事務局長をされていた山西司朗さんが詳細にご確認ください。

もう一つの工夫は、スペイン語の翻訳を付けたことです。これで日本語が不得意な子どもでも内容がわかるようになっていきます。

シルバー川柳コンクールの応募作品から使わせていただいた川柳では、多少難しい表現のものもあります。ですが、解説文とスペイン語翻訳を付けたことで随分使いやすくなったのではないかと思います。翻訳は、アスンシオン日語校の関尚子校長先生が担当してくださいました。

二〇一八年に日語校と日本人学校

の子どもたちが移民について学べるようにとの思いで「移民すごろく」を作成したときには、ほぼ日本人学校教員だけで制作したため、日語校や日系社会を巻き込んだ作業にならなかったのが反省点でした。かるたの制作では、コロナ禍にもかかわらず、非常に多くの方々の助けをいただきました。日本人学校と日系社会の皆様とで「ともに作り上げた」制作物である、と私は思っています。

完成したかるたは、各日語校や関係各所、そして写真をご提供くださった方々に配付しました。たくさんのお礼のメッセージをいただき、非常に好評をもって受け入れてくださったと嬉しく感じています。祖父母世代から、子ども・孫世代に移住の体験を説明してあげられるようなイメージで作ったので、ぜひご家庭に貸し出すなどしていただきたいと思います。

パラグアイでは現在も対面授業が完全には再開していないので、なかなかかるたを使って思うように遊ぶことはできません。そのため肝心の児童生徒の反応がまだまだ見えな段階ではありますが、アスンシオン日語校では弥政まなみ先生がアプリを駆使してオンライン授業でかるたを使用してくださいました。

生徒さんたちは楽しんで遊んでく

れたそうです。「このかるたは買えないのか?」と聞いてきた子どももいたそうなので、反応は上々と言えそうです。対面授業が全面的に再開するであろう来年度以降には、パラグアイ各地で活用していただけることを願っています。

### 本校における「移住学習」

日本人学校を「日本語教育・日本型教育・日本文化の発信・普及のための拠点にしていく」というAG5の取り組みでは、パラグアイに生まれ育った日系人の子どもたちや、彼らを教える日語校の先生方への教師研修に重きが置かれています。

しかし最終年度となる今年度は、そこに日本人学校の児童生徒たちに対する「移住学習」が加わりました。「パラグアイにおける日本人移住」をテーマに、一、二年生を除くすべての児童生徒が、グループ別または個人で、日系移住地についての調べ学習を行うことになったのです。それが「生きた学習」になるよう、移住地などにお住まいの日系人の方々へのインタビューを必ず含めています。小学五、六年生グループでは、自分たちと同年齢くらいの日系人の子どもたちが昔の移住についてどう考えているのかを知りたいという思い

から、イグアス日語校の子どもたちに対してオンラインでインタビューを実施しました。

「移住してきた様子、苦労の話を聞いたことがあるか」という質問のほか、「日本語を勉強するのはなぜか」、「家庭内では何語で話しているか」、「日系人でよかったこと、困ったことはあるか」などの質問が聞かれました。イグアス日語校からも、「日本のどこの出身か」、「どんなアニメを観ているか」といった質問が寄せられ、オンライン交流のような楽しい雰囲気になりました。

過去の日本人移住とは時代が異なりますが、日本人学校に通う児童生徒も言わば「移住者」です。日本から外国へやって来て、困った経験が

あったり、日本人であることを強く意識することがあったり、またはアイデンティティの変容を感じていたりするかもしれません。日本人移住の歴史や、移住地の今について学びながら、自分自身を振り返るきっかけにしてみたいと思います。

### 持続可能な形での支援・交流の継続を願って

二〇一七年より始まったパラグアイでのAG5は、今年で五年目の最終年度を迎えました。この五年間で、本校と日系社会とのかかわりは格段に増えました。日系社会での日本人学校のプレゼンスを高めたこと、日本人・日系人の移住の歴史を学べる副読本などの教材の作成ができたこととその活用方法を示したこと、日本人学校の教員による出前授業をはじめとした教員研修を実施し、好評を博したことを考えると、AG5を通して支援と交流の絆が確実に強くなっているのがわかります。

多くの反省点や課題もあります。その一つが、事業終了後にどのような日語校に対する支援を継続できるかということです。今後もぜひ授業公開や出前授業を継続し、日本の学校文化を発信し続けてほしい、そして日系社会との絆をつないでい

ってほしいと思います。

コロナ禍では様々な事業が中止を余儀なくされましたが、一つ大きな発見だったのは、遠隔地ともオンラインで簡単につながれるのがわかったことです。合同研修会と出前授業は毎年好評をもって受け入れていただいています。昨年度、今年度の出前授業はオンラインで実施しました(今年度はオンライン日語校に対してもオンライン出前授業を実施)。今後、アスンシオンから遠く離れた移住地の学校に対してのオンライン出前授業や、児童生徒同士の交流といった可能性を持続可能な形で模索して行ってほしいです。

最後に、日本人学校の現校長の道藤祐司先生、前校長の加藤雅亮先生、元校長の田口克敏先生の素晴らしいリーダーシップ、アスンシオン日語校の関尚子校長先生の多大なるご協力、AG5担当の金元弘子先生の深いご献身が、アスンシオンでの事業を実りあるものにしてくださったと、深くお礼を申し上げます。さらに、日本からいつもご支援くださる森茂岳雄教授、見世千賀子准教授、拝野寿美子准教授、そして海外子女教育振興財団の中村雅治相談役とご担当の方にも心より感謝いたします。







九鬼 武先生



川上 隆先生



渡辺 稔先生



曾川 和則先生

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)

## 遠隔合同授業に関する実践研究の成果

明治大学AG5研究チーム 岸磨貴子・関温理・黒木歩／アグアスカリエンテス日本人学校長 九鬼 武  
サンホセ日本人学校校長 川上 隆／リオデジャネイロ日本人学校校長 渡辺 稔／サンパウロ日本人学校校長 曾川 和則

2021年度はAG5(在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業)の遠隔合同授業に関する実践研究を始めて3年目、研究成果のまとめの年です。何を成し遂げたのか、何を伝えたいのか、考え始めると、あれもこれもとたくさんのアイデアが出てきて止まりません。その中でも特に、この3年間の実践研究で明治大学AG5研究グループ、AG5研究提携校4校の現場の教師、AG5事務局が共に積み上げてきた3つの研究成果を報告したいと思います。

成果の一つ目は、遠隔合同授業の実践事例を通じた授業設計や学習環境デザインのノウハウです。たとえば、遠隔合同授業では授業の導入部分が必要で、「子どもが「面白そう」「やれそう」「やってみたい」と思える仕掛けが必要です。「メキシコの学校とつながろう」というだけでは、共に学びたい、学んでいこうという意識は生まれません。「相手のことを知りたい」「相手に伝えたい」「一緒に学びたい」と思える仕掛けと場のデザインが重要です。また、目的や学習状況に合わせた授業設計が必要です。本研究では複数の実践事例を一斉授業型・発表型・発問型・対話型に整理し、各形態の特徴を明らかにした上で、教師の役割、レイアウト、実践に必要な機材やツール、授業の流れや工夫の観点から、その知見をまとめることができました。

二つ目は、遠隔合同授業の問題把握と多様な解決方法です。遠隔合同授業で教師が直面した課題への対応策で成功した事例のうち、繰り返し見られる「パターン」がいくつか出

てきました。それらを「問題の現状・解決のアクション・その結果」の三観点から簡潔に言語化、イラスト化して、パターンランゲージを制作しました。この制作プロセスを通して、問題解決に対する多様な対応についての共通認識がつけられました。多様な解決策が共有されたことで、教師は状況に合わせて自分に合った方法を選択、実施することができました。本研究では二十八種類のパターンランゲージを生成、AG5遠隔合同授業の「知恵の蔵」として要望のある学校への配布を予定しています。

三つ目の研究成果は、本研究を通して生まれてきた新しい挑戦です。本研究では、毎月一度、遠隔合同研修を継続的に実施してきました。その中で、教師の困りごとや「やってみたい」という興味関心を取り上げ、それに対応する活動を始めました。たとえば、グラフィックレコーディング。遠隔合同授業で、子どもの対話的な学びを支えるものとして始めた活動です。他にもオンライン上での子どもの顔出し(肖像権)の問題解決としてZoomの技術を使った活動も計画中です。教師の問題意識や関心から様々な活動が次々と生まれてきたのは教師の授業や子どもに対する見方、関わり方の広がりであ

り、新しい実践ができる環境が学校に整備されたということです。研究開始当初、「合同遠隔授業って?」「どうやるの?」「意義は?」、そんな会話から実践が始まりました。遠隔合同授業の環境整備から授業設計へ、そして子どもや学校組織の変化(遠隔合同授業実施のための支援体制など)へと問題意識が変わっていきました。教師も子どもも学校もそして私たちも共に変化し、成長した三年間となりました。

アグアスカリエンテス日本人学校(メキシコ) 校長 九鬼 武



明治大学 AG5研究チーム  
岸磨貴子・関温理・黒木歩

二〇一九年度よりAG5に取り組んでいます。私が赴任した二〇年度は新型コロナウイルスによる休校で始まり。しかしながら素早くICTを活用した遠隔授業を開始し、課題を解決しながらいち早く授業を軌道に乗せることができました。それはAG5の取り組みがあったからに違いありません。そしてさらに発展させた今年度は全学年、全教員がサンホセ日本人学校(以下、サンホセ校)との遠隔合同授業を行うことで、一層の教育の質向上のためのプログラム開発を進められまし

てきました。それらを「問題の現状・解決のアクション・その結果」の三観点から簡潔に言語化、イラスト化して、パターンランゲージを制作しました。この制作プロセスを通して、問題解決に対する多様な対応についての共通認識がつけられました。多様な解決策が共有されたことで、教師は状況に合わせて自分に合った方法を選択、実施することができました。本研究では二十八種類のパターンランゲージを生成、AG5遠隔合同授業の「知恵の蔵」として要望のある学校への配布を予定しています。

三つ目の研究成果は、本研究を通して生まれてきた新しい挑戦です。本研究では、毎月一度、遠隔合同研修を継続的に実施してきました。その中で、教師の困りごとや「やってみたい」という興味関心を取り上げ、それに対応する活動を始めました。たとえば、グラフィックレコーディング。遠隔合同授業で、子どもの対話的な学びを支えるものとして始めた活動です。他にもオンライン上での子どもの顔出し(肖像権)の問題解決としてZoomの技術を使った活動も計画中です。教師の問題意識や関心から様々な活動が次々と生まれてきたのは教師の授業や子どもに対する見方、関わり方の広がりであ

り、新しい実践ができる環境が学校に整備されたということです。研究開始当初、「合同遠隔授業って?」「どうやるの?」「意義は?」、そんな会話から実践が始まりました。遠隔合同授業の環境整備から授業設計へ、そして子どもや学校組織の変化(遠隔合同授業実施のための支援体制など)へと問題意識が変わっていきました。教師も子どもも学校もそして私たちも共に変化し、成長した三年間となりました。

アグアスカリエンテス日本人学校(メキシコ) 校長 九鬼 武

アグアスカリエンテス日本人学校(メキシコ) 校長 九鬼 武

り、新しい実践ができる環境が学校に整備されたということです。研究開始当初、「合同遠隔授業って?」「どうやるの?」「意義は?」、そんな会話から実践が始まりました。遠隔合同授業の環境整備から授業設計へ、そして子どもや学校組織の変化(遠隔合同授業実施のための支援体制など)へと問題意識が変わっていきました。教師も子どもも学校もそして私たちも共に変化し、成長した三年間となりました。

アグアスカリエンテス日本人学校(メキシコ) 校長 九鬼 武

アグアスカリエンテス日本人学校(メキシコ) 校長 九鬼 武

アグアスカリエンテス日本人学校(メキシコ) 校長 九鬼 武

アグアスカリエンテス日本人学校(メキシコ) 校長 九鬼 武

アグアスカリエンテス日本人学校(メキシコ) 校長 九鬼 武



た。この取り組みの中で感じたことを三points述べます。

### 一 直接授業、間接授業を取り入れ ての多様な授業形態の実施

サンホセ校との合同授業を実施する際のネットワークは、時差や授業時間の調整でした。しかし今年度よりライブで交流しなくても、事前に授業動画などを送信し合い、それを授業で活用することで間接交流の授業を実施することができました。双方の都合の良い時間に授業ができるので無理がなく、直接授業に向けての動機付けや深まりにもつながり、授業を柔軟かつ多様性を持って構想できるようなった点は大きな進歩と考えられます。これにより三年目となる今年度は全学年、全教員がサンホセ校との交流授業を行い、成果を上げることができました。

### 二 児童生徒の相手(サンホセ校の児童生徒)を意識した発言や発信

本校は一学級が二人から十二人です。人数が少ない学級では授業中の話し合いはいつも同じ相手となるので、互いの考えていることは良く分かるが、新たな視点やより考えを深めるという点において課題がありました。しかしサンホセ校との合同授業で他の同年年の児童生徒の意見を聞くことで、自分の考えを一層深めることができていました。また動画を撮影

する場面では、本校のことを知らない相手のことを考えて、どうしたら分かりやすく紹介できるかを考えたり、クイズ形式にするなど工夫をしたりして、普段以上に思考しながら表現していた姿が印象的でした。

### 三 教員の意欲向上にもつながった 交流による新鮮な刺激

「次の交流授業が楽しみです」は多くの児童生徒の感想です。交流授業を重ねるごとに子どもたちの表情が明るくなり、相手の発言に頷いたり、自分の意見を積極的に述べたりする場面が多くなりました。他校と交流する中で良い刺激を受けて一層頑張ろうとしている姿を見ていると、今年度の研究テーマでもある「主体的、対話的で、深い学び」にもつながったことを実感します。本校の教員たちも児童生徒の変容を感じることで、ICTを活用した遠隔授業の工夫を日々行いながら、より質の高い授業を構想している姿が見られました。

コロナ禍にあって、十月現在まだ本校は分散登校を行っています。ICTを活用した遠隔授業により多くの教育の可能性を発見できました。今回のAG5の取り組みができたのもサンホセ校を始め、海外子女教育振興財団及び関係の皆様のご協力のおかげと深く感謝申し上げます。

## サンホセ日本人学校(コスタリカ)

校長 川上 隆



本校は二〇一九年度よりAG5の取り組みを始めました。研究テーマは「ICTを活用した遠隔での教員研修及び授業実践のプログラム開発」。初年度は準備段階として共同研究校のアグアスカリエンテス日本人学校(以下、アグアスカ)と交流中心の遠隔授業を行いました。子どもたちは様々な意見交流をすることで、学びを深めていく楽しさを知りました。二年目の二〇年度は、世界的なコロナ禍の中で、日々の遠隔授業に追われましたが、前年度から研究準備を進めていたおかげでスムーズに移行できました。子どもたちの学びを止めないよう学校全体でICT活用に取り組み、教員も子どもたちもスキルが格段に向上しました。毎日の遠隔授業が研究や研修となり、アグアスカとの合同研究授業に生かすことで学校や国の枠を超えた実践も可能になりました。そして最終年の今年度は取り組みが広く参考となるように研究を進めています(詳細はAG5ポータルサイトを参照)。

### 一 遠隔授業の長所と短所

私は二〇年度に赴任しました。以

下、その感想を述べます。まず、教員全員(七名)で研究に取り組んできたことが一番大きいと感じます。

二〇年度はコスタリカ政府の政令で四月から十二月まで遠隔授業が続きました。当初は手探り状態でしたが、問題点や解決策を各自が校内共有ドライブに入れ、打合せ等で確認することで全員の実践力を高めることができました。それが子どもたちの学習意欲や成果にもつながりました。

遠隔授業の長所は、①間接交流(時差や進度の違いを考慮した録画共有)や直接交流が自在に組める、②少人数学級が、他校の同年多数と学習できる、③他校異学年との学習もできて様々な考えに触れられる、④国境を越えて様々な分野の専門家(ゲストティーチャー)に学ぶことができる等、これまで考えられなかった資源の有効活用ができ、子どもたちの学びがより広がり深まることです。具体的には、新たな価値や不足している情報に気付くことや、自分の考えを深めることができる。相手に理解してもらうために、効果的な表現法を考え身に付けることができること等です。実際、本校では一学年一学級(一〜三名)で、教師とのやりとりが中心の授業ですが、遠隔合同授業ではアグアスカの子どもたちと一緒に学習でき、意欲的に取り組む

様子が印象的です。中学部では、キヤリア教育の一環として、様々な職業の方々に日本から遠隔授業をしていただき、生徒の専門的な知識が増え、自分たちの世界を広げることができています。通常とは違うコミュニケーションによって知識・技能を活用し、思考・判断・表現を繰り返すことで学びがより深まっているのです。今までなかなかできなかった取り組みが、離れていても時差がクリアできれば手軽に実現できるのが遠隔授業の最大の魅力だと考えます。

一方、①画面越しで子どもと直接向き合えない(関係づくりや指導の難しさがある)、②実技教科(理科の実験や音楽・体育・技家・美術の実技作業等)に向かないなどの短所もあるように思います。今年度もコストアリカ政府の政令で、一学期に七週間(三十五日間)の遠隔授業を余儀なくされました。そこで、中学部の理科は実験動画で遠隔授業を進め、対面授業に戻ってから実験を体験させることを重視しています。また、技術科の実技や作業は遠隔ではできないので、対面授業に戻ってから授業時数を増やして対応しています。

**二 対面授業を補完する遠隔授業**

我々教員は対面授業を大切にしてきました。それは、児童生徒と直接ふれあうことが何よりも大切である

ことを理解しているからです。ただ、対面授業ではできないことが、遠隔授業では可能になる場合が多々あります。日本人会の会長やJICA支所長によるSDG'sの授業、東京の離島の小学校との間接録画交流、世界の日本人学校との合同授業(蘇州日本人学校主催)、隣国のパナマ日本人学校との定期的な交流授業もその例です。このように本校は対面授業の中に遠隔授業の長所をうまく取り入れた併用型(ハイブリッド授業)の活用を通し、子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けてこれからも研究・実践を続けていこうと考えています。

### リオデジャネイロ日本人学校 (ブラジル)

校長 渡辺 稔

二〇二〇年三月、突然日本国内全ての学校から子どもたちの明るく元気な声が消えました。リオデジャネイロ日本人学校も政府からの指示で休校となりましたが、幸いにも一九年度からAG5「ICTを活用した遠隔での教育の質向上のためのプログラム開発」の研究指定を受け、サンパウロ日本人学校(以下、SP校)と遠隔での研修や授業に取り組んでいたことも



あり、四月当初よりオンラインでの授業をいち早く開始できました。このように研究二年目はいきなり遠隔授業の実践から始まりました。本校が目指したのは遠隔会議システムを使った対話型授業です。児童生徒と教師のやりとりがあり、教室で行うのとできるだけ遜色のない授業提供を心がけました。最初は不慣れでしたが、様々なアプリを使い、情報交換しながら指導法を日々改善することで、遠隔授業を定着させることができ、徐々に教科数や授業コマ数を増やしていきました。特に本校が対面授業を再開してからは様々な授業形態で研究を進めました。外部講師を招聘(しょうへい)しての講演会や学校行事などもオンラインで実施できました。パートナー校であるSP校とは、

遠隔会議で研究についての協議を重ねました。「グローバルな人材を育成するにはどうしたらいいのか」、両校の考えを持ち寄り見えてきたのが「多様性を受け入れる」「柔軟で豊かなコミュニケーション力」「協働できる子ども」の三つのキーワードです。それらを踏まえ、小規模校である本校と中規模校であるSP校の特性に配慮しながら、三つの部会に分かれて研究を進めました。

三年目は二年目の反省を生かし、日常的にSP校の児童生徒との交流

を重ねることで互いを知り、話し合いも自然な形で行えるようになりました。少人数の本校児童生徒にとっては同世代の友達のような考えを知ることや、目的に向かって話し合いを重ねながら一つのものをつくり上げる活動は貴重な経験となりました。さらにこの交流は、他のAG5研究校児童生徒との交流や、ブラジルにあるマナウス日本人学校との合同授業へと広がりを見せています。学校と自宅、リオと日本をつないだハイブリッドでのオンライン授業、また日本在住のOB・OG、ブラジルの連邦大学生や日本語モデル校生徒との交流も行い、オンラインの可能性を広げる取り組みとなりました。新たな取り組みは、新たな課題を生みましたが、「できないではなく、どうしたらできるのか」を常に考えながら解決策を探ることで、着実にスキルを積み重ねることができました。

反面、オンラインの課題も見えてきました。不安定なネット環境への対応。子どもの集中力が続かない。画面に映らない児童生徒の様子が把握できない。教材研究(授業準備)に多くの時間が必要となる。技能教科など、オンラインに適さない科目への対応。児童生徒の健康面の懸念(特に目、運動不足)。ブラジルとの時差。学習以外の学校が担うべき役



割の欠如（人間関係・集団活動）など、課題も浮き彫りになりました。

新型コロナウイルス感染症によるパンデミックで、社会は大きく変化しました。オンライン授業の可能性と課題を明確にした上で、対面授業に効果的に取り入れていくことが、新たな教育の進むべき道と考えます。研究は始まったばかりで、まだまだ多くの課題が残っています。しかし本校の研究成果が、今後の新たな教育の礎になれば幸いと考えます。

### サンパウロ日本人学校（ブラジル）

校長 曾川和則

二〇一九年、「遠隔教育」という研究テーマに出会った当初、第一回校内研究会ではまさに戸惑いしかなかった。「何ができるのだろうか」。ホワイトボードに書き出した、



たくさんの「？」と不安からスタートしました。

しかしAG5「遠隔教育」研究チームとして組織された中南米四つの日本人学校合同の研修会を重ねる中で、確かな光が見えてきました。

まずは先駆的な日本の学校の取り組み事例をベースに、「遠隔授業」の目的や内容、それに基づく四つのラ

イブ授業パターンに出会えました。児童生徒の学び方と教師のかかわり方から目指す授業のイメージを抱くことができました。また自己と授業の達成状況をはかるルーブリック評価の手法を獲得し、明確な指標を設定することの大切さを学びました。この指標を通して授業を振り返り、子どもの確かな成長とより良い授業づくりという視点から、次に目指すものを形にすることができました。

機器の扱い方や活用方法にも磨きがかかりました。定期開催された合同研修会は、互いの成果や課題を共有し、悩みや疑問を分かち合い、解決する場となりました。当初に抱いていた不安や戸惑いが楽しみや希望へと変わっていく時間となりました。本校とペアを組ませていただいたリオデジャネイロ日本人学校（以下、R J校）とは何度も話し合いを重ね、合同で「遠隔授業」を構成し、実践してきました。コロナ禍前の研究一年目は、R J校の校長先生、研究主任の先生を本校に迎え、顔つき合わせて協議し、研究の柱立てを行いました。最初に取り組んだことは、研究テーマの設定。本研究を通して、両校の目指すものを言葉にしました。夜は懇親会。ペア研究の重要ポイントは、お互いに語り合い、分かり合

い、仲良くなることです。子どもた

ちの「遠隔合同授業」を始めるポイントもまさにここにあると言えます。本校とR J校が終着した「遠隔教育」のテーマ（研究主題）は、「多様性を受け入れ、柔軟で豊かなコミュニケーション力を持ち、協働できる子どもの育成」です。研究一年目は、

両校を遠隔システムでつなぐこと。自己紹介から始めて、学校を紹介したりして、街の見どころを教え合ったりして、仲良くなることを目指しました。まずは「やってみる」に重点を置き、道徳やプログラミングの合同授業を仕組みました。その中で、研究テーマのキーワードである「多様性」「コミュニケーション力」「協働」を具現化していく取り組みを進めました。研究の土台づくりとチームの結び付きに力を注いだ一年です。突然のコロナ禍による学校閉鎖命令で幕を閉じた研究二年目。「子どもたちの学びを止めない」ために、本校はいち早くオンラインの授業を立ち上げましたが、その背景には「遠隔教育」に取り組んでいた自信と研究成果がありました。学校が開けない中、日々オンライン授業を重ねながら、「遠隔授業」の可能性を切り拓き、オンラインでしかできない「遠隔合同授業」を追究してきました。

研究主題に迫り、達成するために次の「三つの子ども像」を打ち立て

「聞く力」「話す力」「発信する力」を授業の中で育成する具体的な力としました。

○多様性を受け入れる子ども  
○柔軟で豊かなコミュニケーション力を持つ子ども  
○協働できる子ども

また、この三つの力をつなぐものとして、私たちが追究したのが「人間関係力」です。オンラインで行う遠隔教育だからこそ、この力の育成を基盤とする新たな形の授業づくりを目指しました。

研究三年目。取り組みは、「子どもが主体的に学び、他者との協働を通して、新たな世界を開く授業」（目指す授業像）へと結実しました。この三年間の軌跡により、私たちは、次の二点を柱とする「遠隔合同授業」づくりを進め、授業を検証し合い、新たな形の授業「サンパウロ・プラン」の構想を抱いています。

① 子どもが主体的に学ぶための教材  
② 子どもが協働し、学びを深める学習展開  
「遠隔教育」研究のチャレンジはコロナ禍を乗り越え、輝かしい未来に向かう子どもたちが、新たな自分と世界に出会う道標となります。それは、紛れもなく私たち教師が変わり成長した三年間でもありました。

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)

# 「日本人学校における特別支援教育に関する遠隔支援の実施に向けた実証的研究」の成果

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 情報・支援部

2019年度、文部科学省から「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（AG5）」を受託していた海外子女教育振興財団は「日本人学校における特別支援教育に関する遠隔指導の実施に向けた実証的研究」を、国立特別支援教育総合研究所の協力を受けて行うこととなりました。なお2020年5月、文部科学省総合教育政策局国際教育課と国立特別支援教育総合研究所は共同で「教育課程等実施状況調査（特別支援教育関係）」を行いました。

## はじめに

「教育課程等実施状況調査（特別支援教育関係）」の結果によると、海外に約一〇〇校ある日本人学校には、障害の診断のある児童生徒は一八四名、診断はないが特別な支援を要する児童生徒が四二九名在籍していることが明らかになりました。

しかし特別支援学級を設置している日本人学校は十校、通級指導教室を設置しているのは十七校と限られており、これらの学校は現地の支援を得にくく、国内の専門・相談機関や医療機関との連携も私立学校のために難しい状況にあります。加えて、日本人学校には文部科学省からの派遣教員と日本人学校が雇用した教員があり、その背景が多様であることから特別な支援を必要とする子供に対する指導経験が少ない者もいることが課題として挙げられています。

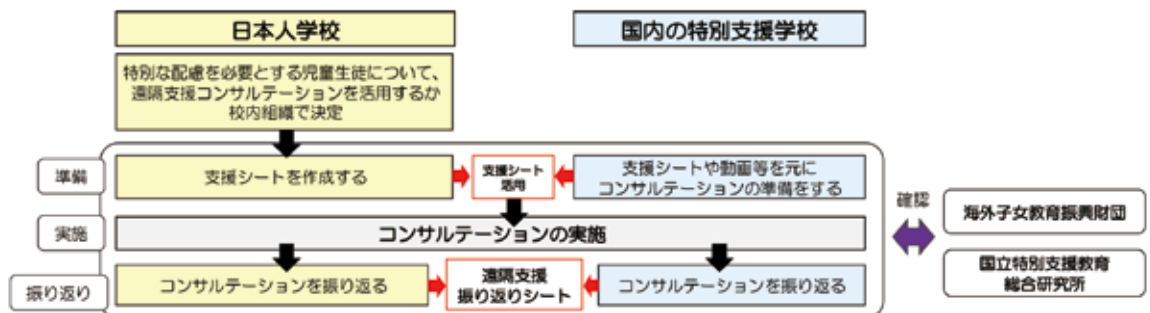
国立特別支援教育総合研究所は、海外子女教育振興財団と連携し、日本人学校の教員が特別な支援を要する子供の指導に関する悩みを解消・軽減できるよう、「遠隔支援コンサルテーション」の仕組みを検討し、実施方法の整理を行ってきました。本研究における「遠隔支援コンサルテーション」とは、日本国内の特別支援学校等の教員が、日本人学校

の教員に対して、ICT機器を使用してコンサルテーションを行うことと定義し、日本人学校における特別な支援を必要とする子供への指導・支援の充実や校内支援体制の充実が図られることを目指しています。

## 1 遠隔支援コンサルテーションの試み

本研究は一九九年度から二一年度まで実施してきました。在外教育施設研究提携校からは、ハノイ日本人学校及び北京日本人学校、国内の研究協力校からは筑波大学附属大塚特別支援学校、東京都立調布特別支援学校、埼玉大学教育学部附属特別支援学校及び横浜市立日野中央高等特別支援学校に協力していただきました。一九九年度には、遠隔支援コンサルテーションを実施するための準備として特別支援学校や日本人学校の実態把握を行いました。

その実態把握で得られた知見を元に、事前に対象の子供の状況を整理・共有するための「支援シート」、その後コンサルテーションの内容を整理するための「振り返りシート」を作成しました。二〇年度から二一年度には、実際にこれらのシートを用いて、遠隔支援コンサルテーションを実施しました。



遠隔支援コンサルテーションの手続き

## 2 遠隔支援コンサルテーションの様子

遠隔支援コンサルテーションは、各月に一回一時間程度、対象の子供は一〜二名程度、日本人学校の教員が選んで実施しました。コンサルテーションを進めるうちに予定していなかった子供に対する指導の相談がなされる場面も見られましたが、特別支援学校の教員からは「対象人数は少ない方が、じっくり話ができる」という意見も聞かれました。

実際に行われた遠隔支援コンサルテーションの一例をご紹介します。

### (1) 支援シートの記入

まず、日本人学校が対象の子供を選びます。主に集中力の持続や、他者との関わり方に関して支援が必要だと考えられるAさんが対象となりました。次に、支援シートの概要欄に、子供の生育歴や学校での様子、得意なことや学習に対する意欲や態度等の実態について記入されました。相談内容には、これまでの授業中のAさんの様子やどのように支援等に取り組んできたかについて具体的に記入されました。例えば、「みんなよりも遅れて行動することが多い」に対し、「集団活動の際には、約束が視覚的にわかるツールを用意し、必要に応じて提示した」ことが記さ

れていました。この支援シートは特別支援学校の教員に共有されました。

### (2) コンサルテーションの実施

コンサルテーション当日には、まず日本人学校の教員から、支援シートの内容を中心に子供の様子や悩みについての説明がありました。次に特別支援学校の教員が質問して日本人学校の教員が回答する形式でAさんについての理解を深め、話し合いの中で指導・支援の提案がなされました。例えば特別支援学校の教員からは、Aさんと教員間の約束の決め方について、「○○してはいけません(走ってはいけません)等」といった否定形でなく、「○○しよう(ゆっくり歩こう)等」といった肯定的な約束も行うことで、場に応じた行動を示すことができるのではないかといった提案がありました。

また、子供の行動の背景にある気持ちや、授業作りの工夫についてのアイデアが共有され、今後の指導に向けて日本人学校と特別支援学校の教員が共に考える時間となりました。

### (3) コンサルテーションの振り返り

コンサルテーション実施後、まず日本人学校の教員が振り返りシートを記入しましたが、新たな視点で授業以外でも対象の子供と関わるうとあったことが書かれていました。そ

の後、特別支援学校の教員から、具体的な支援方法についてさらなる情報提供がなされました。

Aさんに関するコンサルテーションは継続して行われており、その度にAさんの肯定的な変化が報告され、新たな悩みの相談もなされています。

## 3 遠隔支援コンサルテーションに関する事業報告会の実施

本研究の三年間のまとめとして、「AG5事業報告会」が海外子女教育振興財団の主催、国立特別支援教育総合研究所の協力のもと、二十一年十一月にオンラインで開催されました。在外教育施設や国内の教育関係者、企業関係者等、約一二〇名の方に視聴申込みをいただきました。

報告会では、国立特別支援教育総合研究所から遠隔支援コンサルテーションの概要説明が行われたのち、

①ハノイ日本人学校に対する埼玉大学教育学部附属特別支援学校によるコンサルテーション、②北京日本人学校に対する筑波大学附属大塚特別支援学校によるコンサルテーションについて、各校が報告を行いました。

その報告の一部をご紹介します。  
①ハノイ日本人学校は、埼玉大学教育学部附属特別支援学校と共に遠隔支援コンサルテーションを実施しま

した。ハノイ日本人学校が参加を決めた理由の一つとして、全ての子供が豊かに過ごすことができる校内支援体制の構築を目指していることが挙げられました。実際に遠隔支援コンサルテーションを機に生徒指導部を中心に校内支援体制を構築し、ケース会議を実施することで教員間の共通理解を図っていました。

コンサルテーションにおける具体的な取り組みとして、支援シートに記入する際に教員間で検討を重ね、課題や指導内容を整理したことが挙げられました。また、コンサルテーションの内容を具体的に指導・支援に生かしていました。例えば、子供の実態に応じてわかりやすいイラストで予定を説明することや、「頑張りカード」にシールを貼るといった方法で、他の教員や保護者と共に成長を応援するような機会が増えたと感じていました。

また、遠隔支援コンサルテーションの様子を全教職員が視聴可能とし、校内研修の一環としたことにより、教職員全体の専門性向上につながったと述べられました。

埼玉大学教育学部附属特別支援学校はハノイ日本人学校の全教員が視聴することを踏まえ、視覚的にわかりやすく伝えるための資料準備を丁



寧に行っていました。ハノイ日本人学校のからの支援シートには子供の背景や課題が詳しく書かれていたため、子供を理解するのにとても役立つたとの感想がありました。加えて、オンライン授業の様子を映像で視聴する機会があったことで子供のイメージを持ちやすくなったとの意見がありました。コンサルテーションでは担任の先生や特別支援教育コーディネーター、校長先生等、複数の教員から子供の様子を聞き取り、障害特性や、障害の理解の仕方・考え方、具体的な支援方法について助言することができたと報告しています。

埼玉大学教育学部附属特別支援学校の教員からは、子供の背景が日本と異なるケースを共に考える機会となり勉強になったことや、ハノイ日本人学校の校長先生を筆頭に教員らのチーム力が徐々に高まっている様子を目の当たりにできて良かったということが報告されました。一方で、事前に子供の様子が詳細にわかる動画の共有や、生活環境や支援環境の違い等についての情報があれば、さらに充実したコンサルテーションを行えると感じていました。また、不登校やHSC (Highly Sensitive Child (非常に敏感な子)) についても話題に挙がるため、特別支援

学校の専門性とは異なる場合の対応の難しさについても語られました。

②北京日本人学校は、筑波大学附属大塚特別支援学校と共に遠隔支援コンサルテーションを実施しました。北京日本人学校が参加を決めた理由として、学習や生活面で困っている子供や様々な背景のある子供が在籍しており、彼らへの対応に教員が悩んでいたということが挙げられていました。教員は対象の子供を選ぶにあたり、日本人学校の教員の入れ替わりや担任の交代を考慮して、複数年にわたり継続的な支援ができるという点を重視しました。対象の子供の選定後はコンサルテーションに参加する教員と担任が協力して支援の方向性を検討しました。

同時に、授業録画ビデオを提供して実態をより詳しく伝えられるように工夫しました。コンサルテーションでは、授業の理解が難しく学習へのモチベーションが上がらない子供への指導について「子供が達成感を得られる課題を設定する」という提案を受けました。そこで、授業中に個人のレベルに合ったプリントを導入したところ、子供の成功体験が増加し、少しずつ学習に対して前向きになったそうです。また、見通しを持った行動が苦手で、勝敗へのこだ

わりが強く負けると大声を出したり物に当たったりする等の様子が見られた子供には、実態に合わせて活動内容を調整する等の支援が検討されました。これらを受けて授業の再構成を図ったところ、離席が減少し、感情抑制の課題が改善されました。

さらに、支援シートを引継ぎに活用したことで、複数年にわたる継続的な支援が可能になったことや、子供の様子を伝えるために録画した動画が、自身で支援を見直すきっかけになったことが報告されました。

筑波大学附属大塚特別支援学校からは、事前に校内で共有できる資料を作成したことが工夫点として挙げられました。コンサルテーションでは、継続して特定のケースを検討していくことで子供の変容が見られたことや、相手校の教員らが子供のポジティブな行動や変化を捉えることが増えていったことが報告されました。筑波大学附属大塚特別支援学校の教員は、教員間で子供のポジティブな面を共有できる雰囲気を作られたことを遠隔支援コンサルテーションの重要な成果だと捉えていました。一方、遠隔地でのオンライン支援であるため、相手の教員の表情が見えにくいことや、その場に居合わせないことで生じる不安、現地の文化

に合わせた指導の必要性等、遠隔支援コンサルテーション特有の難しさについても述べられていました。加えて、日本人学校の教員が三年で入れ替わるという特有の難しさがある中で、支援が必要な子供たちの学びを保障するための引継ぎシステムの確立の必要性を感じていました。

このように、各日本人学校がこの機会を活用し、指導・支援の充実に努めていました。また、特別支援学校は支援シートや映像情報を元に、全教員が考えるきっかけとなるように工夫した資料を作成し、日本人学校の教員や対象の子供の変容を丁寧に捉えていました。

## 終わりに

本研究で検討した遠隔支援コンサルテーションの仕組みや実施方法は、協力していただいた日本人学校における特別支援教育の充実に向けた一つのかたちとして、一定の成果を挙げたと考えられます。

今回実施した遠隔支援コンサルテーションの概要や手順は、現在、海外子女教育振興財団と国立特別支援教育総合研究所が協力して作成しているマニュアルに記載されます。今後、日本人学校における特別支援教育の充実に寄与したいと考えます。

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)



シンガポール日本人学校チャンギ校 「調べたことを伝えよう」

特集 1

# 在外教育施設から 未来をひらく

二〇一七年度に海外子女教育振興財団が文部科学省の委託を受けて始めた「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（略称：AG5）」が、五年の事業期間を終える。これに伴い、本年一月六日に東京・愛宕の海外子女教育振興財団において、座長の佐藤郡衛先生をはじめ運営指導委員の先生が、同財団の中村雅治相談役らが集まり、まとめの会を開いた。

本誌の巻頭で連載してきた「AG5だより」も最終回を迎えることとなり、このまとめの会で報告された内容を特集枠でお送りする。

当初は五つだったプロジェクトが八つに増え、また二〇年からは新型コロナウイルスの影響により、それまでは（ときには海を渡って）対面で行われていた活動をオンラインに切りかえる必要が生じた。だがそれは同時に、リモートでの教育や支援の可能性をひらきもした。なかには日本国内の学校に先駆けるような成果も生まれてきた。未来世代が世界で活躍していけるように、こうした事業を国内外で継続していく方が問われている。

なお、詳しい研究経過や成果等についてはAG5のサイト (<https://ag-5.jp>) をご覧いただきたい。



まとめの会の様子



さとう くんえい  
佐藤 郡衛

東京学芸大学副学長、目白大学学長を歴任し、現在は明治大学特任教授。AG5運営指導委員会委員長

## 「グローバル人材」の育成は時代の要請

**佐藤** まずどういう経緯でこのAG5が始まったのか、中村相談役からお話ししていただくことから始めたいと思います。

**中村(雅)** 海外子女教育振興財団では二〇一一年に創立四十周年記念事業の一環として、「帰国児童生徒に関する総合的な調査研究報告」を佐藤郡衛先生に座長を依頼してまとめていただきました。そのなかで新たな教育に向けた三つの視点として、適応のための教育、国際教育、グローバルな学力の育成というものを提示していただきました。特にグローバルな学力の育成という視点では、批判的思考力、問題解決力、コミュニケーション

ション力、協働能力、想像力を高める教育をすべきではないかと。そのための取り組みが一三年の、蘇州の日本人学校でのグローバル時代にふさわしい新たな創造をしたいという要望にこたえるための支援です。アクシヨンリサーチ型の取り組みを行うため、まず全校の実態調査から始めました。また、一四年には

香港日本人学校から学校改革への助言を求められ、日本版のIB (PYP)\*1) 的な取り組みをご提案いたしました。具体的には四年生からグローバルクラスという特別なクラスを新設し、教育内容も学習指導要領に準拠しながら探究学習を日本語と英語の両言語で学ぶグローバルスタディーズという科目を新設。加えて、英語力の向上をはかるため、理科と数学を英語で学ぶイマージョン教育を導入しました。



香港日本人学校グローバルクラス6年生「地質学習」

この間、国内では急激にグローバル化が進展する社会における教育改革が議論され、国の日本再興戦略でも在外教育施設における質の高い教育の実現および海外から帰国した子どもの受け入れ環境の整備ということが明確に謳われるようになっていきました。そこで一六年四月に発足させたのがG-ONEプロジェクト (Global Overseas New Education Project) というもので、在外教育施設におけるグローバル人材育成等の研究を、蘇州や香港で取り組んできたことや補習校に対する支援も含めて一括して行っていくと考えたわけです。

期を同じくして、文科省でも四月に「在外教育施設グローバル人

材育成強化戦略」を検討するタスクフォースが設置され、一六年五月に「在外教育施設グローバル人材育成強化戦略」\*2) がまとめられました。具体的提案としては、「日本人学校等のグローバル拠点としての活用・発信強化」「高度グローバル人材育成拠点としての日本人学校の教育水準の強化」「派遣教員の確保・充実、質の確保」「教育面における学校運営との連携強化」というようなことが示されました。そして、文科省からの委託を受けて「在外教育施設の高高度グローバル人材育成拠点事業」AG5を一七年四月にスタートさせました。

- 佐藤** AG5は、Advanced Global Five Projectsの略です。最初は次の五つのプロジェクトから始めました。
- ① 日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発
  - ② 日本人学校における日本語教育プログラム開発
  - ③ 日本人学校における教員(学校採用教員)の指導力向上のためのプログラム開発
  - ④ 補習授業校における日本語能力向上のためのプログラム開発
  - ⑤ 日本文化発信の拠点形成プログラム開発



なかむら まさはる  
中村 雅治

海外子女教育振興財団の専務理事/理事長を経て、現在は同財団の相談役

\*1 PYP 国際的カリキュラムであるIB (International Baccalaureate) の一部で、3歳～12歳を対象とするPrimary Years Programmeのこと。

\*2 [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/002/\\_icsFiles/afieldfile/2016/09/08/1376422\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/_icsFiles/afieldfile/2016/09/08/1376422_2.pdf)



この⑤は日本語と日本文化の発信プログラムの開発と学校の図書館を活用した文化交流のプログラムの二つを行いました。一九九年になるとICTを活用した遠隔での教育の質向上のためのプログラム開発と特別支援教育に関する遠隔指導の実施に向けた実践的研究が加わって、八つのプロジェクトになりました。

もともとはグローバル人材ということだったんですけれども、それと同時に在外教育施設の課題解決も含めて、新しい在外教育施設の方向性なり新しい教育の姿を見出したいということ、ある程度の成果は出せたのではないかと考えています。

それでは、それぞれのプロジェクトについて、ご担当いただいた先生から発表していただきたいと思えます。

### 日本人学校はグローバルで 探究的な学びに最適

日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成  
のためのプログラム開発

植野美穂

二〇一六年から香港日本人学校香



うえのみほ  
**植野美穂**  
海外子女教育振興財団教育  
相談室長

港校からの要請で特色あるカリキュラムの開発に取り組んでいました。

その翌年にAG5が立ち上がったときに考えたのが、この香港での成果からグローバル型能力を身につけるような特色ある教育（グローバルスタディーズ）を他の学校にも展開していくことでした。つまり日本人学校には日本の国内の学校よりもごく多様な子どもたちが集まっていますし、異文化にあることで、さまざまな問題・課題をグローバルに考えることができます。日本人学校こそ教科の枠を超えてグローバルな視野で探究的な学びを実現する場であるはずなので、シンガポール、パリへと広げていったわけです。

探究学習については、子どもたちが調べて発表して終わりと捉えられていることがありますが、たんなる調べ学習とは違い、子どもが自ら課題を発見・追究し、議論し、答のない新たな課題を生み出して取り組んでいくというサイクルです。そのような本来の意味での探究学習はどう



パリ日本人学校研究紀要「世界で活躍するグローバル人材の育成～「対話的な深い学び」による授業改善を通して～」

あるべきか、各日本人学校で研究開発をしていただきました。

シンガポール日本人学校の場合もともと現地理解教育を中心とした総合学習に取り組んでいました。AG5に加わってからは、IBの考え方をとり入れて、子どもにとって身近なシンガポールが抱える問題を切り口に、子どもたちの価値観や行動の変容が見られるような深い学習活動へと発展できたと思います。

またパリ日本人学校では、二十一世紀型スキルの育成を目指した汎用性がある小中一貫探究学習のカリキュラム開発に取り組んでいます。一九年度にはテーマに沿ったフィールドワークに出かけることができましたが、二〇年度はコロナの影響もあり日本国内の五つの研究機関によるオンライン講座をもとに子どもたちが「学びの地図」を作成し、最終的には「パリ日提言フォーラム」を開いてそこで発表するに至りました。これらの実践を他の日本人学校に



「日本人学校における「探究学習のすすめ」～実践ガイドブック～ 第1部 理論編」  
<https://ag-5.jp/report/theme1/study/detail/138>

紹介するため、日本人学校ならではの探究学習のよさや難しさ、探究学習では教科活動をどう行えばいいのか、探究学習のカリキュラムを開発していく具体的手順などを含めた『探究学習のすすめ』という実践ガイドブックをまとめました。すでに理論編ができあがっていますが、今年度は香港、シンガポール、パリの実践を具体的に紹介する実践編をもなく発行する予定です。

課題としては、さまざまな交流を試みたなかで、学校を越えて同じようなテーマについて深く子ども同士が学び合う場を設けるのは難しいように感じました。

さらに学校独自で特色あるカリキュラムや科目をつくった場合、日本人学校の先生は入れかわりが激しいので、それをつなげていくのがすごく大きな課題になります。そのためにたとえば香港では新しく赴任した先生にもわかるように、「グローバルスタディーズはどのようなものか」「何を大切にしているのか」「どう展

開しているのか」「子どもたちが主体的に学べるための学年ごとの評価の方法とは何か」についてきちんとまとめたものを学校内で作成しましたが、それを他の学校などにも使っていただけのようにつくり変えていく必要もあると思います。

## 日本人学校で効果的に日本語を学ぶ

### 日本人学校における日本語教育プログラム開発(1)

#### 見世千賀子

二〇一七年から一九年まで台湾の台北、台中、高雄の三つの日本人学校で行った事業です。

まず台北では、三割を超える子どもたちが国際結婚家庭の子どもで、かなり前から日本語指導が必要な一、二年生を対象に週一回、放課後に三



#### 見世千賀子

東京学芸大学国際教育センター准教授

十五分、日本語の補習の時間を設けていました。今回のプロジェクトではそうした取り組みをベースとして、日本語指導が必要な子どもが在籍学級での教科学習によりいっそう参加できるようにすることを意識したプログラムをつくりました。具体的には、国語と算数と総合的な学習のなかで、語彙とか文章の理解とか子どもがつまずきやすい箇所を取り上げて、一回あたり二十分程度でできるような活動を学年ごとに二十回分ずつつくりました。通常の授業に先立って学習しておくことで子どもたちがより積極的に授業に参加で



台北日本人学校 iPadを活用した授業の様子



『日本語補習クラスのための学習活動案集 ~台北日本人学校の実践から~』  
<https://ag-5.jp/report/theme2-1/study/detail/92>

きるようになり、先生がたにもそうした先行的な学習の効果への気づきが生まれるなどの成果がありました。台中でも、半数近くが国際結婚家庭の子どもたちで、日本語指導が必要な子どもが多く在籍しています。そのため、中国語の授業の裏の時間で日本語の指導を一年生から六年生まで、週一回行っています。今回のプロジェクトでは、在籍学級での日本語支援の視点をとり入れ、より子どもたちの学力を上げていく試みを行い、『在籍学級での日本語支援の視点をとり入れた授業づくりの手引き』を開発しました。ひとりの子ども



『在籍学級での日本語支援の視点をとり入れた授業づくりの手引き ~台中日本人学校の実践から~』  
<https://ag-5.jp/report/theme2-1/study/detail/97>



台中日本人学校 ICT機器やデジタル教科書を算数や国語などで有効に活用

もを想定していただいて、日本語に關してどのような手立てがあればより授業に参加できるようになるかを意識したうえで、授業をどのようにつくっていくか、手順も含めてわかりやすく示しています。

高雄日本人学校では、現地校の中に間借りした校舎があるという環境を生かして、派遣教員の先生が現地校の五、六年生を対象に日本語や日本文化を教える活動をしています。その際に活用する教材を開発しました。子どもたちが興味を持ちやすい日本のアニメや食べ物などの画像をとり入れた学習、あるいはゲームやタブレット端末などを活用しながら楽しく学べるような活動案集をまとめました。こうした取り組みを通して、日本人学校の先生がたは異文化や他者を理解することの重要性や必



高雄日本人学校 日本のアニメキャラクターなどを用意しておき、児童の興味に合わせて使用できるようにする。



要性を肌で実感されています。また、現地の子どもに教えることを通して、自分たちのクラスにいる台湾ルーツの子どもへの理解も進んだそうです。日本人学校における授業においても、日本語の面や文化の違いなどに目が行くようになったという成果がありました。

全体を通して、日本語指導体制を充実させることがまだまだ必要だと思えます。台北では三年生以上の学年では補習が行われていません。少数者だとか個別の指導を必要としている子どもたちもいます。また同時に、台中で行ったような在籍学級での日本語支援の視点をとり入れた授業づくりも、すべての学校で必要だと考えています。

加えて、母語あるいは母文化を大事にしながら多文化共生を柱にした授業づくりを行っていくことが今後の課題として挙げられると思います。そしてもう一つ日本人学校への派遣教師がよりグローバルな感覚を持つ教師として育っていくために、高雄で行われているような取り組みは非常に有効ではないかと思えます。教師としては言語も違い、負担の大きいところではあります。その反面、得られるものも大きいと考えています。

## 日本語指導から 多文化共生へ

### 日本人学校における日本語 教育プログラム開発(2)

#### 近田由紀子

台湾での実践を基盤にしつつ、それを発展させるような形で、一九九年度から二一年度までマニラ日本人学校を拠点に大連日本人学校、青島日本人学校が提携・協力して日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発と、そのための教員研修のプログラム開発、複言語主義を取り入れた総合学習型日本語指導に取り組みました。複言語主義というのは、学習者に焦点を当てて、子どもたちがもともと身につけている第一言語を活用しながら複数の言語を育てていくというものです。多文化共生の学校づくりを含めた日本語指導として取り組みました。

まずマニラ日本人学校、大連日本人学校、青島日本人学校の取り組みですけれども、この三校は学校の規模も体制も違います。たとえばマニラ



こんだ ゆきこ  
近田 由紀子  
目白大学専任講師

日本人学校では、週一回放課後に日本語学級を開設して学級担任が指導するとともに、在籍学級の授業でも日本語支援をしています。青島日本人学校は日本語指導担当教師が学校組織のなかに位置づけられていて、課外で日本語支援をしていたり、個別に取り出して指導したり、学級に入り込んで指導したりしています。そして学校全体でも取り組んでいます。大連日本人学校は課外での日本語指導はなく、日本語学級もありませんが、在籍学級で日本語支援を行っています。

でもプロジェクトを始めてみると、共通点が多々ありました。一つは体制づくりで、校内研修と関連させることでおのずと多文化共生の学校づくりに向かっていったことです。二つ目は実態把握と評価です。それぞれ個別の指導計画を作成していますし、指導の記録も取っていて、そこからふり返しをし、次の指導に生かすという、PDCAのサイクルがき



青島日本人学校 オンライン交流会の様子  
(2020年度青島冊子より)



大連日本人学校 インタビューでわかったことを発表・共有。動画・画像など視覚的アプローチで支援を行う。(2020年度大連取り組み報告資料より)



マニラ日本人学校 日本語指導を取り入れた授業実践。小らの総合的な学習で川の環境を改善するにはどうすればいいか考える。





『日本語学級・在籍学級での教科横断的な日本語指導～マニラ日本人学校の対面・オンライン授業の実践から～』  
<https://ag-5.jp/report/theme2-2/study/detail/133>



『多文化共生の学校づくり～青島日本人学校の実践～』  
<https://ag-5.jp/report/theme2-2/study/detail/128>

ちんとできています。三つ目は日本語支援にバイカルチュラルの視点を加えた授業実践です。教科横断型の視点からプランを立てるとか、総合的な学習として単元を組んでいくとかの例があります。具体的には、体験的な活動や表現活動を重視した学校づくりをする、モデル文を使ったキーワードを示したりするなどがあります。また日本語支援にICTも活用しました。これらの取り組みのなかで、特にバイカルチュラルな視点を生かした授業実践、たとえば現地素材を使ったり、在留国と日本の文化を比較したりする実践は効果的でした。青島日本人学校では自分のルーツとかかわりのある絵本を紹介しようという実践がありました。在留国だけにルーツを持っている子ばかりでなく、ほかの国にルーツを持っている子どもたちもいます。そこで多様性がさらに広がっていきました。そして子どもたちの自己肯定感が高まったり、自信につながって

いったりという成果が見られました。四つ目は連携・協力です。教職員のチームワークはもちろんのこと、保護者との連携・協力というのが欠かせなくて、三校とも丁寧に保護者とかかわって協力を得ていました。これらの成果を、他の日本人学校や国内の外国人児童生徒等の教育を行っている学校の参考になるのではないかと考え、オンラインでの情報交換会・合同研究会という形で発信しました。このプロジェクトの二つ目の柱である教員研修にもつながっています。ほかの日本人学校や補習校の先生、国内の外国人児童生徒を教えてらっしゃる先生も参加されました。この機会を通して悩みや課題を共有できたことが大きな強みになったんですね。先生たちのネットワークが芽生えてきて、それが力になり始めるところまでこぎつけたのが成果です。

今後の課題としては、三校の成果を他の日本人学校でもぜひ活用してもらいたいことです。地域の特色に合わせたより魅力的な実践を期待しています。それには支援が必要で、この三年で生まれつつある教師のネットワークとか、先生たちの意欲とか、そういうものを大事にして発展していけたらいいと思っています。



### 日本人学校における教員(学校採用教員)の指導力向上のためのプログラム開発

植野美穂

日本人学校や補習校の先生がたには文部科学省からの派遣教師だけではなく、それぞれの学校が独自に採用した学校採用教員の先生がたがいらっしゃいます。派遣教師の充足率は平均七割から八割ですが、大規模校では五割程度です。学校採用教員の先生がたには新卒のかたも転職してくるかたもいらっしゃいますが、こうした先生がたの指導力の向上を目指しました。まず二〇一七年に、実際にどういうプログラムが求められているのかを知るために学校採用教員が半分近くを占めている上海日本人学校で調査を行ったところ、じつは赴任前研修のニーズが高いことがわかりました。そこで一八年度には上海日本人学校の学校採用教員を対象とした二日間の赴任前研修を行いました。それ以降も、研修内容を改善しながら、海外子女教育振興財団の支援で採用されるすべての日本人学校の教員を対象に続けています。いま行われているのはワークショップ形式ですが、「もつと時間をかけていろんなワークショップに参加したい」という声も出ています。また基本的な指導力というものを考え直していただくために、教員としての基礎、学習指導に対する基本的なこと、それから事故対応や保護者対応などの仕方をまとめたハンドブックを作成しました。各校で研修を行



学校採用教員の赴任前研修の様子(教科等指導の基本的な授業の進め方について)



さっさ のぶゆき  
**佐々 信行**  
海外子女教育振興財団教育  
相談員

高度グローバル人材の育成といえ  
ば、補習校の子どもたちは自動的に  
複数の言語を使用する文化のなかで  
生活してるわけですから絶好の環境

——  
補習授業校における日本  
語能力向上のためのプロ  
グラム開発——  
**佐々 信行**

**世界中の補習授業校の  
先生が力を合わせる**

う際のマニュアルとしてご活用いた  
だいていると思います。



『日本人学校等教員のための初  
任者研修ハンドブック』  
[https://ag-5.jp/report/theme3/  
study/detail/66](https://ag-5.jp/report/theme3/study/detail/66)



ダラス補習授業校 ダラスで自分が見つけたものが、  
日本にいる親戚や友達に伝えるように文を書く。

きました。学習活動計画と呼

にあるんですね。ただ、多様な子ど  
もたちが来ているなかで充実した学  
習を重ねることの難しさもある。特  
に日本語の力が違っていている子ども  
ちがいっしょにいると、先生が説明  
してわからせるような授業では誰か  
にとってはちよほどよくても、誰か  
には難しすぎる、あるいは誰かには  
やさしすぎる。子どもたちの活動を  
中心に、それぞれの持つてる力で活  
動に参加することで伸ばせる、そう  
いう授業を組み立てていかなければ  
いけないということになります。そ  
こでこのプロジェクトではまずアメ  
リカのダラス補習授業校の先生たち  
と、具体的に教科の単元を設定して、  
これをどういうふうに教えたらいい  
かと、一つ一つ授業をつくって



「楽しく日本語を伸ばす 補習  
授業校学習活動計画集  
～ダラス補習授業校の実践から～」  
[https://ag-5.jp/report/  
theme4/study/detail/105](https://ag-5.jp/report/theme4/study/detail/105)



「補習授業校児童生徒の学習  
状況調査等報告書」  
[https://ag-5.jp/cms/ag5/  
common/pdf/theme4/  
Gakushujokyochosa.pdf](https://ag-5.jp/cms/ag5/common/pdf/theme4/Gakushujokyochosa.pdf)

んでいきますけど、これを皆さんに提  
供して見ていただいたんです。  
そこにだんだんと、見てもらうだ  
けではなく、ダラスの先生がたはも  
ちろんですけど、集まってくださる  
先生がたが学習活動計画をつくる  
ところから参加してくれるようにな  
り、授業研究会というような形で参加  
してもらえるようになりました。結局  
三十一単元分ができました。  
やがて人数が増えてきたので、こ  
の研究会に参加してくださるかた  
「補習校ネット」という名前のグル  
ープをつくりました。現在は九十四  
校から二五八名の登録があります。  
アメリカ、ヨーロッパはもちろんア  
フリカやオーストラリア、中南米か

らも参加してもらっています。それ  
で毎回、授業とその前後に研究会と  
いう流れで進めて、最後に学習活動  
計画を公開するというような形をと  
っています。それを見ていただいで  
参考にしていたくのも成果ですけ  
ど、こうやって先生たちが集まって  
一つのテーマで研究できるようにな  
ったということが非常に大きな成果  
だといえるのではないかと思います。  
次にもう一つ、こういう授業研究  
にしても何にしても、いちばん必要  
としているのは先生になったばかり  
のかたがたなんです。補習授業校  
は規模が小さいところも多いので、  
独自で初任者研修を充実させること  
は難しい。そこで二〇年度から私た  
ちで計画をして、年に五回ないし六  
回オンラインで研修会をやることに  
しました。二一年度の参加者は一九  
〇名、所属校は七十八校でした。  
三つ目は、補習授業校情報交換会  
というイベントです。二〇年度に、  
どこの学校でもコロナの対応に苦慮  
していた時期に「おたく、ウイルス  
対応はどうしてますか？」みたいな  
ことを聞きたいということがあって、  
声をかけて集まっていたのが  
はじめです。やがてウイルスだけ  
じゃなくてこういうことはどうなんだ  
というようになりクエストに応じて



次々にやってきましたら、今年の一  
月で三十六回になりました。参加者  
はメーリングリストに登録している  
人だけで三五七人。補習授業校の先  
生たちは時間も余裕もないところで  
生活しているのです、同じ仕事をして  
いる人たちと交流する機会がなかっ  
たということ、喜んでいただいて  
います。ここで知り合った人たちが  
自主的に研究会を立ち上げたとい  
うこともありました。そういうもの  
きっかけになったことも、一つの成  
果だと思っています。

## 日系人コミュニティと 手を結ぶ

### 日本文化発信の拠点形成 プログラム開発

見世千賀子

日本人学校を、現地の日系社会へ  
の日本語教育、日本型教育、日本文  
化の発信拠点にするという、パラグ  
アイのアスンシオン日本人学校を中  
心としたプロジェクトですが、二つ  
紹介します。一つは教員研修です。  
二つ目が移住に関する学習について  
です。

まず教員研修については、パラグ  
アイには日本型教育をとり入れてい  
る現地の学校が二校ほどあります。  
日本の教育をしつけや教科学習の面  
などで非常に高く評価して、日本語  
の教育も積極的にを行っています。ま  
たそれとは別に、六つの日系人移住  
地と三つの主要都市に合わせて九つ  
の日本語学校があり、日系の子ども  
たちに日本語や日本文化を学ばせる  
ために教科の学習はじめ日本的な行  
事を取り入れた教育活動が行われて  
います。

そういったことで、現地の学校や  
日本語学校の先生を対象に、アスン  
シオン日本人学校の先生が教員研修  
を行っています。日本人学校の授業  
を参観していただいたり、逆に日本  
語学校に派遣教師の先生が出向いて  
日系人の子どもたちに授業を行った



パラグアイ移住かるた



『わたしたちのパラグアイ  
第3版』

[https://ag-5.jp/report/  
theme5/study/detail/147](https://ag-5.jp/report/theme5/study/detail/147)



『わたしたちのパラグアイ  
第3版 活用事例集』

り、ということをされてきました。  
コロナ以降はオンラインになりました  
が、日本人学校の先生がたがどう  
いうふうの子どもたちに接している  
か、教材をどういうふうに表示する  
かといったことについて、非常に多  
くの学びがあったそうです。

二つ目が、日系人の移住に関する  
学習に取り組むための教材を多数開  
発して、それらの学習を実施したこ  
とです。子どもたちが楽しく移住に  
ついて学べるような教材、それを通  
して日本語の力も身につけられるよ  
うなものをつくっていかうと取り組  
みました。その過程でパラグアイの  
移住者のごろくですとか、パラグアイ  
移住かるたなどを、現地の日系人の  
協会のかたがたにもご協力いただい  
て作成することができました。わか  
りやすい日本語だけではなくてスベ  
イン語もつけています。

また日本人学校の方では、社会科  
の副読本である『わたしたちのパラ  
グアイ』の第三版を作成しました。  
新たな副読本は二部構成にしまして、

特に第二部では中学生まで含めて全  
学年の子どもたちがパラグアイの日  
系人の移住の歴史について学べるよ  
うな内容にしています。さらに日本  
語学校の子どもたちも使えるよう  
にルビをふったり、わかりやすい日本  
語をつけたりしています。

実際、これらの教材を使って、日  
本人学校の子どもたちはパラグアイ  
や現地の日系人社会についての理解  
が深まると同時に、日本国内の外国  
人移民について、また世界の移民の  
人たちについても考えを広げること  
ができて、非常にグローバルな視野  
を持つてこの課題に取り組むことが  
できるようになりました。さらに日  
系人の子どもたちも、日本人として  
のアイデンティティであるとか、自  
分のルーツについてあらためて考え  
直して、これからどう生きていくの  
かを考えることにもつながったとい  
う成果がありました。このプロジェ  
クトを通して、日本人学校を拠点と  
しつつ現地の学校や日系人の日本語  
学校等との新たな関係性が構築でき  
たことは非常に  
よかったですと思  
います。  
ただ、これを  
よりよい関係性  
づくりにつなげ



ていくためにどうするかが課題になってきます。今回のプロジェクトにおいては現地に優れたコーディネーターがいてくださいました。しかしプロジェクトが終わったあとに継続させていくためには、日本語学校側も受身的にならず、また日本人学校側も現地社会に貢献することを自分たちの課題として捉えて、お互いが主体的にかかわっていくこうとする関係性づくりとシステムづくりが必要ではないかと考えています。

### カリフォルニアで「日本のファン」をつくる

——学校図書館を活用した文化交流——

中村雅治

アメリカのカリフォルニア州は日系人も多く、日本語を教えている国立の学校が二〇〇近くあるんですね。そういう人々と学校図書を紹介して文化交流するような支援活動を目指してスタートしました。

西大和学園カリフォルニア校は校舎とは別棟で図書館を持っているので安全対策が取りやすいメリットが

あります。しかしアメリカなので、はじめは安全対策の観点から、交流校の生徒あるいは教師、保護者を対象に、西大和の生徒さんが、たとえば茶道の歴史や作法について学習して、それを英語で発表する。そうした活動にそれを書いてある図書をセットにして紹介することを行いましたが、これが非常に効果が高いということ、けん玉だとかお花だとか、いろんな日本文化を紹介する活動を行っています。現地校から注文を取って図書を貸し出し、貸し出した図書の活用成果をフィードバックしてもらおうという流れが出てきています。二〇二〇年のオリンピック・パラリンピック前には、オリンピック・パラリンピックの歴史コーナーを設けたりもしました。

コロナ禍になってから対外活動は止まっておりますが、西大和学園の



けん玉貸し出しセット

地域的にも離れている補習授業校とデジタル図書を活用した取り組みを行ってまいります。デジタル図書はオンラインでサービスが受けられることに加え、音声で読み聞かせる機能や検索機能もあり、学習者の個々のニーズに合わせた使い方ができるのではないかと、引き続き研究を続けてまいります。

さらに西海岸にはカリフォルニア州を含め大きな日系人コミュニティもあり、公立図書館にも数多くの日本の図書、新聞や月刊誌、漫画も含めてそろっているようなところがあります。そういう図書館とうまく連携していきたいと考えています。

文化交流を通じ、日本のファンをつくる活動の一つとして学校図書館の活用もあるのかなと思っています。

### 子どもたちが心待ちにする遠隔合同授業

——ICTを活用した遠隔での教育の質向上のためのプログラム開発——

後藤彰夫

二〇一九年度から、メキシコのア



ことあきお  
後藤 彰夫

海外子女教育振興財団教育相談員

グアスカリエンテス日本人学校とコスタリカのサン・ホセ日本人学校のペア、そしていずれもブラジルにあるリオ・デ・ジャネイロとサンパウロ日本人学校のペア、つまり二グループ四校で、学校間で子どもたちを結び、合同遠隔授業や合同遠隔教員研修を行ってきました。

成果は大きく分けて三つあります。一つ目は、遠隔授業の形態を「一斉型・発表型・発問型・対話型」に分類して整理するなかでそれぞれの特



アグアスカリエンテス日本人学校との合同遠隔授業 (サン・ホセ日本人学校)



サンパウロ日本人学校の児童のクイズに答えるリオ・デ・ジャネイロ日本人学校の児童

徴を明らかにして、授業の流れや工夫、教師の役割、必要な機材やツールをまとめることができたことです。二つ目は、合同遠隔授業で直面した課題に対して、問題点と解決のための行動、その結果を二十八種類の「知恵の蔵（遠隔授業におけるパターンランゲージ）」としてまとめることができたことです。三つ目は、合同遠隔授業の実践のなかでオンラインでの子どもの顔出し（肖像権）の問題をどのようにしていくのかなど新しい挑戦が生まれてきたことです。合同遠隔授業を重ねれば重ねるほど、他校の子どもたちといっしょに授業を受けられることを期待し、積極的に相手のことを尊重し、理解していこうという子どもたちの姿が見られました。

一方、教師の側では、子どもの集

中力を継続させる工夫、画面に映らない子どもを把握する方法、不安定なネット環境への対応、授業準備の時間の確保、オンラインに適さないと考えられる授業の準備や対応、そして授業以外で学校が担うべき人間関係づくりや集団行動の指導などをいかに補完していくかなど、さまざまな課題が見えてきました。各校の先生がたがそれぞれひとりぼっちで目の前の子どもたちを指導・支援するのではなく、学校を越えて先生がたを結び、子どもたちを結ぶ教育を実践することで、より効果的な教育を提供できると考えています。

研究の二年目には突然のコロナ禍により学校が閉鎖されました。しかし「子どもたちの学びを止めない」ために、四校ともいち早くオンラインの授業を立ち上げました。これは、「遠隔教育」に取り組んでいた自信と研究成果によるものです。

この成果をそれぞれの地域の現地校等へフィードバックしていただき、時間軸を越えた結びつきと継続的な実践を期待しています。また二グループ四校での実践から、他校を巻き込んだ面的な広がりが見られてきています。この継続と拡張から、合同遠隔授業がさらに深まることを期待しています。

国内と海外を結んだ  
特別支援

特別支援教育に関する  
遠隔指導

新原和正

日本国内でも通常学級に在籍している児童生徒のなかに特別な配慮を要するお子さんが約六・五パーセントいるといわれますが、二〇一八年度に文部科学省と国立特別支援教育総合研究所が日本人学校に対する調査を行った結果、日本人学校でも約四パーセントのお子さんが在籍しているという状況が明らかになりました。そこで私たちも日本人学校の実態として、特別支援学校や支援学級などでの指導経験がある教員がどれくらいいるのかということ調べたところ、「まったくいない」もしくは



かずまさ  
新原 和正  
海外子女教育振興財団  
総務チームリーダー

「一人」という学校が半数以上でした。特別支援の免許を持っている先生となると「ゼロ」もしくは「一人」というところが七割に近い。さらに特別支援教育に関する専門機関とか相談機関等が現地には少ない。言語の問題もありますが、連携が可能な医療機関というものも少ない。そこで遠隔システムを活用し、日本国内の特別支援学校と協働してコンサルテーションの実施と効果の測定を行うプロジェクトを実施しました。

だいたい月一回から二回ですが、対象となるお子さんの状況や課題について日本人学校から情報をいただきまして、お子さんの状況を把握したうえで支援学校からのアドバイスを行ってきています。

成果としましては、日本人学校が支援学校と協働して取り組むことで校内の支援体制の強化にも役立ったと感じています。そして、日本人学



遠隔によるコンサルテーションの実施

校では三年で先生がたが入れかわる

ということで、引き継ぎが本当に重要だと認識いただいたりとか、校内に特別支援教育に対する文化を持つ、最初から難しいとかできないとかいうスタンスではなくて、「日本国内と同じようにやるのがあたりまえ」という意識づけが大事だという認識を持っていただいたりしたことがよかったですと感じています。今回はハノイと北京の日本人学校にご協力いただきましたが、全職員の校内研修の一環と位置づけていただいて、チーム力の向上にもつながったとか、先生たちの間で子どものポジティブなところを共有できる雰囲気醸成につながったとも聞いています。

一方、国内側の支援体制のさらなる強化、また日本人学校のさらなる体制強化、特別支援教育に携わる人員の配置等が課題だと感じています。そして、やはり時差への対応や不安定な通信環境の改善も考えていかなくてはならないと思っています。

## これからのために

**佐藤** すべてのプロジェクトの報告をしていただきましたので、次は全体的なことでご感想があるかたはひ

とことずつ。

**植野** 私は教員研修の必要性を痛感しました。長いスパンで教師が学ぶ時間を十分に確保し、システムとして教師が学べる環境をつくるのが大事であると。そのためのお手伝いが求められていると考えます。国内にいると学会や私的な研究会などに参加する機会もつくれるのですが、海外にいるとなかなか難しい。オンラインもICTも活用して、それぞれの先生が関心ある研修に参加できるような仕組みを考えていってもいいのではないかと思います。

**見世** いちばんは多文化化とグローバル化が進むなかで、海外の日本人学校だけではなく、日本国内の学校教育自体も変わっていかないとけないなと、あらためて感じました。

「日本の子ども」といったときにそれはどういう子どもなのかと、国内においても考えてグローバルな市民を育てることを目指した教育を考えていくことが必要なのではないかなと。

もう一つは、子どもたちはほんとうに移動しながら生きていくんだなということ。日本人学校にいる子どもたちは移動しながら学んでいるわけですが、国内においても外国の子どもたちが増えていますし、ま

たそういった子どもたちといっしょ

に学ぶ、まだ日本しか経験していない子どもたちも当事者であると考えられます。だから移民学習というのはこれから重要な非常にいいテーマではないかとあらためて思ったところ。国内の教育を変えていくためには、帰国された先生がたの国内でのグローバルな活動をもっと自由に、活発にできるようにサポートしていくことも必要だと思いました。

**近田** 日本語支援について、当初、国内の外国人児童生徒教育のノウハウを使ったのですが、国内を追い越すというか、よい取り組みができました。だから逆輸入というか、日本人学校が日本の学校のロールモデルになっていくのもいいんじゃないかと思いました。

**佐々** 補習授業校の先生ってそもそもが国際人材なわけで、意欲もあればいろんな力や知恵を持っている人がいるので、どんどんさまざまなことが発展していくというようなことがあります。ですから私たちはこれからそういう場をつくること、そして多くのかたにこういう場があると知らせていくことをやっていけば、もつともつといういろいろなことが進んでいくのではないかなと思います。オンラインでつながるといえるのは、

やってみたら意外と簡単にできるの

で、これをこの先も続けていけたらと思います。

**新原** 昨年の十一月十三日に事業報告会を実施しました。世界各国から約一二〇名のかたにご参加いただきました。質疑応答では、保護者に対するかかわり方とか、日本人学校同士のかかわり方といったことも含めて、かなり活発な意見交換がなされました。将来的には日本人学校同士が連携して支援をする仕組みや、在外だけで課題解決ができるような体制というものが理想なのかなと感じています。

**佐藤** では、このプロジェクトをいっしょに進めてきた岡村先生、渋谷先生からもお願いします。

**岡村** 補習校チームで、おもに学習活動計画や初任者研修、補習校調査・分析を担当しました。クラス補習授業校をはじめ世界中の熱意あふれる先生がたとつながることができ、楽しく充実した五年間でした。自分自身が補習校で教えていたときにもこんなサポートがあったなら、と思えるような研修を皆さんと力を合わせて形にできたことをとてもうれしく思います。

**渋谷** 私も補習校チームに参画し、公開授業を拝見するなかで、海外に





おかもら いくこ  
**岡村 郁子**  
東京都立大学教授



しぶや まき  
**渋谷 真樹**  
日本赤十字看護大学教授



みつい ともゆき  
**三井 知之**  
海外子女教育振興財団  
教育相談員



なかむら まさこ  
**中村 昌子**  
海外子女教育振興財団  
教育相談員

育ちながら日本の文化を学び、日本語で自分たちの経験や考えを交わし合っている子どもや若者の姿に頼もしさを感じました。彼ら彼女たちが仲間を増やし、飛躍するための力をつけていける在外教育施設でありた

いですね。

佐藤 では、AG5に途中からご参加いただいた三井先生、中村先生からもひとことずつ。

三井 AG5のおかげで補習校の先生がたの横のつながりが生まれまして。研究協議会でも一つの授業に対して世界中の先生が意見を言い合える輪ができて、これはすごいなと思っています。ですからぜひ継続して、さらに広げていけたらいいのではないかなと思います。

中村(昌) テーマ①の探究学習に限った感想ですが、日本人学校ならではのグローバルな問題、あるいはジェンダーであるとか、差別であるとか、日本にいたらなかなか気づけないようなこと、あまり興味関心を持っていないようなことに子どもたちが目をやって、将来グローバルな社会で生きていくときの大きな糧になつていくのではないかなと思います。それをまた日本に持って帰ってきてもらうようなシステムができるといいのかなと強く感じました。

佐藤 はい。では最後に私から簡単に成果と課題をまとめたいと思います。一つ目の大きな成果は日本人学校や補習授業校の今後の教育のあり方について、具体的な実践に裏打ちされた新しい方向性を示すことができ

たのではないかとということ。二つ目

は、学校とか国、地域の壁を越えた実践の広がりが可能になったことで、これは新型コロナウイルスの影響もあるのですが、壁を取っ払うような新しい方向性が見えてきている。三つ目は、在外教育施設の大きな課題である教員の研修つまり教員の力量をどうつけるかということについて、具体的な実践を通して示すことができましたのではないかなと思っています。そして四つ目、財団と私たちも含めて日本人学校・補習授業校の先生が

いっしょにやれたというのがすごくいいことでした。いろんな学校や補習校が協働して課題を見つけ、解決するためにいっしょに考えて、それを具体的にどう実践するか、実践してみてもそこからまた課題を見つけて、また新たに考えて、また実践を試みていくというサイクルができました。これも大きな成果だと思いました。

一方課題としては「継続」。継続するために財政の裏づけをどうするか。継続性を担保する制度的な仕組みがどうしても必要。そして人の継続性も大切です。この学校でこういうテーマで、こういうプロジェクトをやってますけど、そこに行きたい人はいませんか？って手を挙げていた

いでしょか。

では中村相談役、財団としての決意表明で締めてください。

中村(雅) AG5の活動をさらに発展・展開・定着させるため、我々財団ができることは、しっかりとやりたいと考えています。財政的支援、派遣教員の充実等、国と協働していかなければ解決できない課題もありますが、しっかりと連携して取り組んでまいりたいと思います。

いまのところ「国内と同等の学校環境を整える」ことも目指して進んでいますが、これを法的に位置づけることが支援充実のためには大切です。特に教育の質を高めるためには、派遣される先生がたにグローバル人材育成を自分の使命と受け止めてもらうような派遣制度にしていく必要があるのではないでしようか。

そして帰任したら在外での経験が国内でも生かされるような好循環の派遣制度にしたいかなと、これからの継続性維持の課題も解決できないのではないかなと思っています。

今後とも子どもたちと先生がたのグローバル化のために、夢と志を持ち、引き続き関係各位のご指導とご協力をお願いしたいというのが私の切なる要望でございます。よろしくお願いたします。

〒105-0002

東京都港区愛宕1-3-4 愛宕東洋ビル6階

公益財団法人 海外子女教育振興財団

事業部 教育企画チーム

TEL : 03-4330-1351

FAX : 03-4330-1355

E-mail : [ag5@joes.or.jp](mailto:ag5@joes.or.jp)

URL : <https://www.joes.or.jp> (JOES)

<https://ag-5.jp> (AG5)

